

捻くれ少年のラブコメディ

リヨ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ガイルとニセコイのコラボです。

他にも書いている人いるけど、完結したのとかあまり見たことないので完結できるよう頑張ります。

俺ガイルキヤラは八幡しか出てきません。ヒロインは小咲の予定。時系列は千棘が転校してきて少しだつくらいになります。鵜はまだ来ていません。

目次

23話

2
4
話

二〇

2
章

27話

お気に

28 話

家族

3
0
話

3
1
話

最終話

1話

「引越し？」

ある日、親父から突然そんなことを言われた。

仕事の都合で転勤になつたそつだ。

ちなみに東京。隣の県じやねえか。

そういえば昔1年間だけ東京に住んでたことあつたな。

「まあお前は別に友達とかいないし大丈夫だろ？」

「いや、まあそんなんだけど……」

転校することになるじやん。自己紹介とか嫌なんだよな……

「俺どこの高校行けばいいの？」

「ああ。それなら俺の知り合いのツテで凡矢理高校つてとこ通うことになつた。学力もお前と同じくらいだから気にはしない」

「まあそれならいいけどよ」

そしてやつてまいりました！東京！

今日から新たな高校生活が始まる。今はもうすでに学校についており、先生が名前呼ぶらしいのでそれを待つてゐる。自己紹介とか必要なのに。どうせ1人で適当に過ごして終わつていくんだから。いろいろ脳内で考へてゐるといつの間にか俺の名前が呼ばれていた。

「よし、じゃあはいつてこい！」

あー！来ちやつたよ！

「えつと、比企谷八幡です。千葉から引っ越してきました。よろしくお願ひします」

「言えた！ 噛めずに言えたよ！……なんかバカみたいだな。

ガタンッ

俺が自己紹介を終えると突然机が倒れる音がした。

「ん？ 小野寺大丈夫か？」

「は、はいっ！ す、すみません！」

「？ 比企谷。お前の席は小野寺の隣だ。困つたことあつたら小野寺に聞け」

よりによつて女子かよ……

「よ、よろしくね！ 比企谷くん！」

「え？ あ、おう。よ、よろしく」

最初は俺でも質問タイムとかはあつた。

でも適当に答えていたら自然と消えていつた。

「転校すると絶対最初質問攻めされて困るよな」

やつと落ち着けると思つたらまた誰か話しかけてきた。しかも結構構いるし。

「俺、一条楽！ よろしくな！ 比企谷！」

「私は桐崎千棘！ よろしくね！」

「俺は舞子集！ 気軽に集でいいよ！ 八幡！」

「宮本るりよ。よろしく、比企谷くん」

そんなんに名前覚えられるか。

「あ、おう。よろしくな」

まあ最初だけだろ。適当に返事しどこう。

「比企谷の家つてどの辺なんだ？」

「ああ。近くに和菓子屋があつたぞ？」

「和菓子屋？ それつて……」

「ひ、比企谷くん、そのお店の名前つてオノデラつて名前？」

「確かそうだつたな。そういえば名前同じだな」

「だつてそこ私の家のお店だもん！ 比企谷くんだつたんだね！ 前たまたま引越しのトラック見たんだ！」

「そうだつたのか」

その後も適当に他愛もない話をして終わつた。

だが帰りが一番大変だつた。小野寺が一緒に帰ろうと言ひ出したのだ。涙目の上目遣いだつたので断れなかつた。でも小野寺はそん

なにめんどくさいタイプでもない。優しそうで大人しそうで、まさに男子からみたら女子の理想つて感じ。まあ俺は勘違いなんてしないけどな。

とりあえず今日は疲れたから家に早く帰つて寝よう。

翌日

「楽！…どういうことだよ！」

俺が朝教室で読書をしていると、一条も登校してきた。すると舞子がいきなり一条に質問攻めをしていた。

「昨日こいつらが見たんだよ！樂と桐崎さんがデートしているところを！」

「見たであります！」

「えっ?! い、いやそれは……」

「おはようー。どうしたの？」

噂のもう一人の桐崎の登場。

「お、おい桐崎……」

なんか2人でこここそ話してる。

「もしかして付き合つてないのか？」

「結構ラブラブな感じだつたけどな」

「……実は俺たち、ラブラブじやなくて…… 超ラブラブカツップルなんだよなー！ そうだよな！」

「え、ええ！ そうよ！ ダーリン！」

「おおー！ まさかの一条と桐崎のカツップル誕生か！」

なんか教室が騒がしくなつた。

……つていうかなにあの演技？ なんでみんな騙されてんの？

続く

2話

なんなんだこのあからさまにバレる演技は。

なんでみんな騙されてんの？それともわかつててのつてるのか？

「一条くん……」

なんか小野寺が複雑な顔をしている。……あーなるほど。青春だねえ。

翌日

「それでな！……」

なんでこいつら（一条と舞子）はいつも俺のところに来るんだよ。ひつそりと暮らしたいのに。一条なんて今注目の的だから余計に嫌だ。

「ちよつと一条くん、いいかしら？今日あなたの部屋で勉強会したいのだけど、構わない？」

「……はあ!?」

「なあ」

「ん？なんだよ比企谷」

「言いたいことはひとつだ……」

「なんで俺まで勉強会行かなくちゃならんのだ」

「まあいいじゃないのー！男子3人、女子3人でさ！丁度いいし！」

合コンじやねえよ。

「じゃあ早速始めようぜ」

まあ宿題今回多いし別にいいか。

『……』

「ねえ、一条くん、小咲わからない問題があるらしいから見てほしいん

だけど」

「る、るりちゃん!？」

「え？別にいいけど……」

「お、お願ひします……」

… リア充どもめ。

「すまん。俺この問題わかんねえ」

「そこは一番上の公式を使うのよ」

「なんだよ桐崎。お前は自分の宿題を…」

「終わつたわよ？」

「は!? お前今日結構量あるぞ!？」

「ほら」

「… 全部終わつてる」

「桐崎さんつてアメリカでどのくらいの成績だつたの?」

「うーん、通知表はオールAだつたわよ?」

オールAつてめちゃくちゃいいじゃねえか。天才かコイツ。
「そいいえば桐崎さんと樂つてどのくらい進んだの?」

「ぶーつ!?

「キスとかはもう…」

「ちよつとこい! ついでに比企谷も!」

なんでだよ…

「付き合つてない?」

「ああ。家の事情で偽の恋人やつてるんだよ」

「いや、俺わかつてたけど。舞子も気づいてるんだろう?」

「うん」

「はあ!?

「でも面白そうだつたからねー! 気づかないふりしてた!」

「はあ…」

「ま、ほかの奴らはほんとに気づいてないみたいだし大丈夫じやないか?」

「そうだといいけど… 戻るか」

「何話してたの?」

「ちよつとな」

勉強会も終わり、今は小野寺と帰つている。

「それでね、るりちゃんが…」

いつも小野寺から話を振り、俺は返事をするだけ。何故小野寺は俺なんかと帰ろうとするのだろうか。

「……なあ小野寺」

「? なあに?」

「俺なんかと帰つてて楽しいか?」

「え?」

「いや、帰れる時はなんかいつも一緒に帰つてるだろ? 途中までは宮本もいるけど」

「……比企谷くんはいやだつた?」

「いや、そうじやねえけど…… 小野寺は嫌じやないのか?」

「いやじやないよ? 比企谷くんと話してての楽しいよ? 比企谷くん、ちゃんと返事してくれるし」

「まあそれならいいけどよ……」

「これからも一緒に帰つてもいい?」

「…… 気が向いたらな」

「…… ふふつ、捻デレさんだね」

ドクン

…… なんだ今の? 小野寺に捻デレつて言われた途端なんか……

気のせいか

「誰が捻デレだ。俺のどこにデレがあるんだよ」

「そういう割には誘つた時はいつも一緒に帰つてくれるよ?」

「…… たまたまだよ」

「…… そつかー、ならそういうことにしどくよ……」

「おい、ほんとにわかってるのか?」

「わかつてますよー」

「…… つたく」

まあ小野寺と帰るのもたまには…… いいかな。

続く

3話

「よし、じゃあ今日は小野寺と比企谷が日直だな。よろしくー」
黒板消すのって意外と辛いよな。チョークの粉とかがさ。

「んくつ」

小野寺が黒板の方を消すのに苦労している。

「小野寺、上の方は俺がやるから無理するな」

「え？ あ、う、うん。ごめんね」

「比企谷、小野寺！ 後でプリント運んでくれ！」

それ曰直関係ないだろ。パシリか？ サボろつかな。

「サボつたら宿題の量倍な」

⋮⋮⋮ 無理でした。

「意外と重いね」

「まあな。半分持つぞ？」

「べ、別にそういう意味でいつたわけじゃないから大丈夫だよ！」

「いいから」

「う、うん。ごめんね」

「⋮⋮⋮ なあ、その謝るのやめたら？」

「え？」

「小野寺別に悪いことしてないのになんで謝るんだよ？」

「迷惑かけちゃったから⋮⋮⋮」

「それならお礼とか言つた方がいいぞ。その方が一条とかも喜ぶぞ」

「!? な、なんで一条くん！」

「いや、お前の普段の行動とか見てたら一条のこと好きなのがまるわかりだぞ」

「⋮⋮⋮ 一条くんに気づかれてないよね？」

「あいつ鈍感だから気づいてないだろ。俺も別に誰かに言うつもりないから気にすんな」

「⋮⋮⋮ じやあ比企谷くんは好きな人いるの？」

「は？ なんでそんなこと聞くんだよ」

「わ、私だけ知られてるなんてなんかざるいもん！」

「……別にいない」

「そうなの？私たちのクラスとか可愛い子多いからいるのかと思った」

「そんなくだらんこと聞いてないで前向け。転ぶぞ」

「え？う、うん。きやつ！」

言つたそばから小野寺が階段から落ちそうになつた。

「小野寺！」

俺はとつさに小野寺の手を掴んで抱き寄せた。このままだと俺まで落ちる！小野寺だけでも怪我をしないように俺が地面側にならなないと！

ドタトタドタン!!

……小町、俺死んだかも。

……ううつ。どうやら生きていたようだ。背中すごい痛いけど。

「あら、起きた？」

「保健室か」

「ええ。あなた達が階段の下で倒れてるのを一条くんが運んでくれたのよ。男の子ね。小野寺さんをかばつたんでしょ？」

「誰でも階段から落ちそうになつてたらそうするでしょ？」

「そうかしら？なかなかできないわ。一条くんには明日お礼をいうことね。小野寺さん、まだ目覚めてないみたいだから。起きたら戸締りして鍵を閉めておいてくれない？私ちよつと用事があるから。比企谷くんも何日かすれば痛みも引くと思うから」

「はい。すみません。わかりました」

……はあ。小町から連絡來てるな。まあ普段すぐ帰るから遅くなつてたら心配するわな。メール送つておこう。

「んんっ……」

小野寺起きたか？

「……ハチくん……」

ドクン

まだ。胸がざわつくような感じ。それにハチくんって……気のせいに決まってるか。小野寺と会ったの転校してきたのが初めてのはずだし。そろそろ起こした方がいいな。

「小野寺、小野寺起きろ」

「……あれ? ここは……」

「保健室だ」

「そうだ! 階段から落ちて……ハチくん大丈夫だつた! ?」

ドクン

「え? あ、ああ。数日すれば治るつて……なに? ハチくんつて」

「え? …… ! な、なんでもないよ! ちょ、ちょっと言い間違えちゃつたの! あはは! 気にしないで! ね! 」

「お、おう。とりあえず帰るか」

「そ、そうだね! 」

「そういえば一条のやつが保健室まで運んでくれたらしい。明日お礼言つとけ」

「そうだつたんだ。でもお礼言うのは比企谷くんもでしょ? 」

「小野寺から言つといてくれ」

「ダメ! ちゃんと自分で言わないと! 」

「わ、わかつたよ。ていうか離れろ近い」

「! ごめんね! あ、家に着いた。また明日ね! 比企谷くん! 」

「おう」

……さつきの胸のざわつきはなんだつたんだろう。

続く

「小咲」

「あ、るりちゃん！」

今日はるりちゃんと喫茶店に行く約束をしていました。

それは私のある悩みを相談するためです。

「それで、相談つて？恋愛事？」

「う、うん。私が一条君のこと好きなのは知ってるよね？」

「ええ。早く告白すればいいのに」

「と、とりあえずその話は置いといて……実は私、他にも気になつてる人がいるかも知れないの」

「……もしかして比企谷くん？」

「えっ！」

「図星ね。最近はあなた達仲良さげだからなんとなく言つてみたけど、まさか当たつてるとはね」

「る、るりちゃん鋭いなあ……」

「そ、それでね。私、比企谷くんとは一度昔に知り合つてるの」「え？」

「小学校の頃なんだけど、私当時いじめられてたんだ。ほんの一時期だけどね。でもそこに比企谷くんが転校してきたの」「そんなことが……」

「それでね、比企谷くん最初はみんなから質問とかされたり注目されてたんだけど、いつの間にか周りは静かになつてて。それで数週間たつたくらいからある日急に私へのいじめがなくなつたの」「良かつたじゃない」

「うん。でも、その数日後に見ちやつたんだ。私をいじめていた人達が比企谷くんに暴力ふるつてるのを」

「……なるほどね。標的が変わつたつてこと」

「うん。その時なんとかしようつて思つたけど、怖くて何も出来なかつた。でも、ひとりが寂しいのは私が一番わかつてたから私だけでも比企谷くんのそばにいようつて思つたの」

「なんか小咲らしいわね」

「そ、そうかな？… それで、比企谷くん、最初は疑つてたけどだんだん心を開いてくれて。多分その時一番仲良かつたの比企谷くんだったと思う。比企谷くん、見た目は少し怖いかもしれないけど優しくて、日直の時とかプリント運ぶのとかも手伝つてくれたり、ものをなくした時とかも一緒に探してくれたんだ。多分私その時比企谷くんのことが好きだつたのかもしれない」

「なるほどね」

「でも、私と比企谷くんが仲良くしてゐるのを誰かに見られたみたいで、からかわれるようになつたの」

「まあよくあるわよ。そんなこと」

「そこまではいいんだけど、また私もいじめられるようになつたの」「また？ 私、1回そのいじめっ子たちをぶん殴りたいわ」

「お、落ち着いて！… いじめはどんどんエスカレートして、ものとかも取られたりして、暴力とかも振るわれたりしたの。周りから見えない場所にあざとかもできちやつて」

「ひどいわね…」

「それでね、ある日比企谷君が突然「もう俺に関わるな」とつていったの」「比企谷くんが？」

「うん。なんで？ って聞いても教えてくれなくて。それを聞いた次の日から比企谷くんは私と関わらなくなつたの。それでひとりで考えて、もしかしたら比企谷くんは自分と関わるようになつてから私がいじめられてるから関わらなければなくなるつて思つてると思ったの」「突き放したのは小咲を助けるためつてこと」

「うん… でもいじめは続いたんだ。ある日ね、そのいじめっ子たちが誰かと喧嘩したような怪我をして教室に入つてきたの」

「いい気味じやない」

「でも私その時にか嫌な予感がして。比企谷くんその時まだ学校に来てなかつたの。いつも私が学校来る時は教室にいたのに」

「たまたまじゃない？」

「ううん… その後も比企谷くん来なくて、先生が教室に入つてきた

の。それで先生が「比企谷は親の都合で引っ越した」って言つたの」「……だいたい予想はつくわ。その喧嘩したのが比企谷くんでこれ以上小咲に迷惑かけたくないから転校したとかでしょ」

「うん、多分…… それから比企谷くんと連絡取れなくなつて。その時の私じゃ比企谷くんのあとを追うこととはできなかつたから諦めるしかなかつたの。それからはいじめもなくなつて、中学に上がって一条くんやるりちゃん達と出会つて」

「それで高校1年になつて比企谷君が転校してきて再会したつてわけね」

「うん。でも比企谷くん私のこと覚えてないみたいなんだ」

「でしようね。それで、その恋をした男の子と再開してまたその時の気持ちが蘇つてきたつてこと？」

「そう、なのかな。でも今の比企谷くんも昔とぜんぜん変わつてなかつた。ひねくれてるけど困つた時は助けてくれて。とつても優しい人だつた」

「それで、今は一条くんと比企谷君どつちが好きなの？」

「わからない…… つていうのが本音かな」

「それで気持ちを確かめたいつてことね」

「うん」

「……なら一条くんへの告白は中断ね。でもあんた、その鍵のことはどうするつもり？」

「え？…… 約束は大切だけど、今の私じゃなにも分からないうから。今 の気持ちを大切にしたい、かな」

「わかつたわ。でも小咲がどつちかを好きなのかはあなたにしかわからぬわ。だから2人と一緒にいられる時間を作つてあげるわ。あとは自分でなんとかしなさい」

「うん。それだけでじゅうぶんだよ。ありがとう、るりちゃん」

「まさか比企谷くんと小咲にそんな過去があるとは思わなかつたわ。

もしかしたらその約束の鍵の相手も比企谷くんなんじやない？」

「あはは…… それはないんじやないかな？ 小学生どころもそんな話を聞いたことなかつたし」

「あんたが聞かなかつただけでしょ？」

「まあそれだけど…」

「ま、とりあえず今の状況を考えると1番恋人になれるのは比企谷くんよね。一条くんは桐崎さんと付き合ってるんだし」

「ま、まだそんな恋人とかは早いよ！」

「でも、今の小咲を見ていると、比企谷くんに気持ちが寄つてる気はするわね」

「そ、そ、うかな？私そんな素振りを見せたかな…」

「一条くんと話してる時も楽しそうだけど、比企谷くんと話してる時の方が割りかし一条君の時より楽しそうに見えるわ」

「そう…なのかな」

「まあ、急いで仕方ないし、少しずついいきましよう。小咲のペースで」

「うん！」

ハチくん、思い出してくれるといいな♪

続く

5話

今日は帰つて久しぶりに溜まつてたラノベ読むか……
「どこやつたかな……」

かなり前に買つたラノベを探していると、本棚の奥になにか見つけた。

「ん？……箱か？……鍵穴のついたペンドント？」

こんなのは俺持つてたかな……結構高級そうなやつだし。

親父のかな？

「親父、ちょっとといいか？」

「ん、どうした？」

「いや、なんか本棚の奥からで出来たんだが……親父のか？俺のじや

ないと思うんだが」

「ペンドントか？……これお前のだぞ？」

「は？俺こんなの持つてたか？」

「確か昔まだお前が小さい頃に俺の知り合いの子供たちと遊んでた時に何かの約束をしてそのペンドントもらつたって言つてたぞ？」

「……つてことは鍵もあるつてことか？」

「そうじやないのか？しかもこれ見た感じ高そうだし、見つけたのも何かの偶然だから自分で持つとけ」

「わかつた。サンキュー」

それにして俺そんなこと全く覚えてないぞ……なんの約束したんだ？そして誰と？

翌日の帰り

教室に忘れ物した……今日は新作ラノベの発売日なのに。早くしないと売り切れちまう。あれ結構人気だからな。

俺が小走りで廊下を歩いて、ちょうど角を曲がると……

「きやつ」

「うわつ……す、すみません。急いでて」

「こ、こちらこそ……めんなさい……つて比企谷くん？」

「小野寺か」

「どうしたの？」

「いや、ちょっと教室に忘れ物を…… 小野寺なんか落としたぞ？…… 鍵？」しかも結構古びた感じだ。

「比企谷君もなにか落としたよ？…… こ、これペンダント…… ひ、比企谷くんこれ何で……」

「え？ああ、たまたま昨日棚の奥で見つけたんだよ。なんか昔と誰かと約束した時にもらつたらしい。小野寺も古びた鍵持つてるんだな。家の鍵か？」

「……え？あ、う、うんそうなの！」

「何慌てるんだ？」

「え？い、いや別に？慌ててなんかないよ？わ、私がちょっとようじあるからまたね！」

「お、おう」

急にどうしたんだ？

小咲サイド

ど、どういうこと?!あのペンダント一条くんの持つてるとそつくりだつた！今まで一条くんが約束の人かと思つてたけど…… 一体どういうことなんだろ？あの時もつと聞いておけばよかつた……

s i d e o u t

さらに翌日

「比企谷くんちょっとといい？」

「ん？なんだ？宮本」

「私水泳の大会に今度出るんだけど、私のチームで欠員がでちゃつてね。それで小咲を入れたんだけどあの子泳げないから泳げるようにしてほしいの」

「いや、なんで泳げない小野寺を入れたんだよ」

「私の知り合いに泳げる人がいなかつたのよ。だから一番仲のいいあとの子に頼んだの」

「まあ教えるくらいなら別にいいが……」

「そう。ならよろしくね」

一条とかも後で誘うか。

続く

ついでに仕事も押し付けよう。

6話

水泳教室当日

「ちゃんとさぼらずきたのね」

「俺をなんだと思つてるんだ」

「小咲もうすぐ来ると思うわ」

「比企谷く」

「一條くんも呼んだの？」

「ああ。ついでにもう1人」

「るつりちやあーん！げふう！」

「な、んで！舞子君までいるの？」

「いやあなんかついてきた」

宮本怖！舞子の奴抱きつこうとしたらかかと落としされてるし。
「る、るりちやあん！やつぱり無理だよお！」

「おお！」

「あれ？一條くん？それに比企谷くんも！」

「小咲、今日は泳げるようになるために助つ人を用意したわ。私も練習したいから面倒見れないし。じゃあとはよろしくねく」

いつちやつたし…

「あれ？ダーリンも来てたの？」

「え？桐崎じやねえかなんでお前が」

「なんでつて助つ人よ」

「小野寺教えるのに3人も必要か？」

「じゃああんたが帰れば？」

「なんだと？」

「なによ？」

ワーウーギヤーギヤー

うるさい奴らだなあ…

「小野寺、あいつらほつといて練習するぞ」

「え？う、うん…」

「ということで一條頼んだ」

「俺!？」

「小野寺と手繫げれるかもしけんぞ」

「な、なるほど……よしー小野寺! 頑張つて泳げるようになろうぜ

!」

「うん! よ、よろしくお願ひします!」

「はい! ジやあまず私が見本見せるわ!」

「泳げんのかお前?」

「ふつ、なめでもらつちや困るわ! 見ててね小野寺さん!」

バシヤアアアア!

……速すぎるわ。

「お前見本になる気あるのか」

「え! ?」

「さ、流石に今のは速すぎるかな……」

「そ、そんな……」

「あーあ、隅の方でいじけちゃったよ。」

「はあ……すまん比企谷、俺桐崎のこいつてくるから小野寺のこと
よろしく」

「は?」

「もともとお前が頼まれたんだろ? よろしくな!」

『……』

「じやあやるか」

「う、うん!」

「まさか顔も水につけれないとかじやないよな?」

「それは大丈夫!」

「ならまずバタ足からやるか

「お、お願ひします!」

……これは手繫がなきやダメだよな
「じやあ手つかむぞ?」

「う、うん」

ギュウッ

……うわああ! 恥ずかしいよお! なんでこんなに柔らかいの!? し

かもちよつと谷間見えてるんだよ！

「そ、それじゃあ始めるぞ」

「は、離さないでね？」

「わ、わかってるよ」

バシヤバシヤ

「いいぞ、その調子……」

すると遠くの方から……

「は？」

ゴンッ

舞子が飛んできた。

バシヤアアアアン！

「え？・え？・うわあ！」

バシヤアアアアン！

「……つたくなんでお前が飛んでくるんだよ」

「いやあ、るりちゃんと遊んでたら、ね！」

「お前絶対ろくなことしてないだろ」

「ひどいなー！それじやあ俺はまた行つてくるよ！頑張つてね！」

「あいつこりんな…… 小野寺大丈夫か？悪いな手離しちまつて」

「だ、大丈夫！」

「ついでにちよつと休憩しよう」

「そうだね。…… あの、比企谷くん」

「ん？なんだ？」

「その、前にペンドント持つてたよね？」

「ああ」

「それって誰かと約束した時にもらつたつて言つてたけど…… 相手の子のこと覚えてるの？」

「いや、全く。そもそも約束のこと自体忘れてたしな」

「そ、そなんだ」

「それがどうかしたのか？」

「え？・ううん！なんでもないよ！わ、私ちよつと飲み物買つてくるね！」

「あ、ああ」

どうしたんだ？小野寺のやつ。そういうや小野寺も鍵持つてたよな。
古びてたから家の鍵じゃないとするとなにか大事なものか？
……まさかペンドントにはまつたりしてな。……なんか気に
なってきた。

ん？これって小野寺の鍵だよな？こんな古びたのそうないし……

「比企谷くん、なにやつてるの？」

「ん？宮本、それに桐崎も」

「……それ、女子更衣室の鍵なんだけど」

「……は？」

「……まずい

「す、すみまゴフウ！」

「……誤解だ……」

というか桐崎のやつなんてパワーだよ。一条のやつこんなのく
らつてたのか。今度から優しくしてやろう。

「比企谷……さすがに」

「俺でもこんなことしないかな。——」

「ま、待て！誤解だ！女子更衣室の鍵なんて知らなかつたんだよ！」

「そんなの信じるとでも？」

「……ま、待つて！ひ、比企谷くんはそんなことしないよ！……多
分」

「お、小野寺！」

ここに天使がいます！小町に続く天使がいます！

「……今回は小咲に免じて許してあげるわ。その代わりしつかり小咲
を泳げるようにしてよ？」

「はい……ありがとな、小野寺」

「別に気にしないで！」

結局分からんかったな……

水泳大会当日

「桐崎！ちゃんと準備運動しなさい！」

「あんたは私の親か！」

あいつら相変わらずだな。

「小野寺、練習を思い出せば大丈夫だ」

「うん！頑張るね！」

「宮本。すまんなビート版で泳ぐのが精一杯だった」

「え？あ、ああまあ大丈夫でしょ。……でもあの子昔から不器用なとこあるから、溺れたりしなきやいいけど」

「溺れたりなんてそうそう…」

「誰か溺れてるぞ！」

『え？』

… あれは桐崎！？

「あのバカ！」

バシヤアアアアア！

一条が即座に飛び込んだ。

「ふはあ！」

「楽！桐崎さん大丈夫か！？」

「わ、分からん！」

「ど、どうだ？集」

「……息をしてない」

あの顔嘘だな。若干にやけてるし。
「な、なに！？」

「楽、人工呼吸だ」

「は、はあ！？」

「まあ恋人であるお前がやるのが当然だよな
ひ、比企谷まで！」

面白そうなので便乗しました。てへっ！

「……くつ……許せ桐崎」

ついに2人の唇が…

「んんっ・」

あー、桐崎目覚めちゃった。

「!? なにやつてんのよ！」

「ゴフウ!？」

男子更衣室

「はあ、散々な目にあつた…」

「ドンマイ! 楽!」

「元は集のせいだろ!」

「あはは〜」

「意識ないよりは良かつたじやねえか」

「いや、まあそうだけど…！お、おい比企谷

「ん? なんだよ?」

「そ、その手にあるの…」

「ペンドントだけど?」

「ちよ、ちよつと見せてくれ！」

「ほら」

「… 鍵穴は少し違うけど… 比企谷、これど〜で?」

「なんかそれよく聞かれるな。俺の家にあつたんだよ。昔の約束がなんか関係してるつて」

「… 比企谷、俺も鍵穴は違うけどおんなじの持つてるんだよ」

「… は?」

「ほら」

「… そつくりだな。偶然じゃないのか?」

「いや、こんな変わったものどう偶然て同じものがあるとは思えない」

「つてことは俺と一条は昔から会つてたつてことか?」

「そ、そうなるな」

「こりやまたすごいね〜」

「ちなみに一条はなにか覚えてるのか?」

「いや、誰か女の子と約束したつてことしか」

「そうか。俺なんて約束のことも忘れてたからまだいい方だな」

「そ、そんなことより!… ますます謎が深まる。なんで同じもの

が…」

「俺もそれは思うが今考えても仕方ないだろ？·とりあえず帰ろうぜ」

「あ、ああ」

一体どういうことだ？今は考えても仕方ないか。

続く

7話

「で、デートに誘う!?」

現在私はまたるりちゃんと作戦会議をしています。

「ええ。比企谷くん、自分からは絶対誘わないと思うし」

「い、いやでも私まだ一条くんか比企谷くんどつちが好きかわからんないし……」

「小咲はそうかもしれないけど、最近のあんた、比企谷くんのことばつか見てるわよ?」

「ええつ?……ま、まさかバレたりしてないかな」

「気づいてないんじゃない?比企谷くん、昔のことは覚えてないみた
いだし昔の絆は今じやないんだから積極的にいかないと」

「で、でも思い出しててくれるかも……」

「どうやって?」

「……わかんない」

「ま、過去の事言つてもしようがないし、とにかくデートに誘いなさ
い。最初は断りそうだけど来てくれるわよ」

「う、うん……」

さ、誘えるかな……

s i d e o u t

教室

「ひ、比企谷くん!」

「ん?なんだ小野寺」

「そ、その……あ、明日デートしない?」

ガタガタン!

……は?

「……は?」

心の声とかぶつちやつたよ。今なんて言つたこの子?
「で、デートだよ!……だ、ダメかな?」

「……頭でもうつたか？」

「なんで!?」

「ほら比企谷くん、小咲が誘つてるじゃない」
え、そんなこと言われても……周りの殺氣凄いし。断れオーラが
すごい。一条なんて顔面蒼白だし。

「すまんな。俺明日は用事が……」

「あるわけないわよね？さつき聞いた時暇つて言つてたんだから」

「……」

そう言えばさつき宮本に暇つて言つたんだ。いきなり明日の予定
聞いてくるからおかしいと思つたんだよ！……というかもう小野寺
が顔真っ赤にして涙目になつてから断るにも断れんしな……

「……はあ。わかつたよ。行けばいいんだろ」

「ほ、ほんと!? ジヤ、ジヤあ時間とかはメールするね？…… そういうえ
ば連絡先知らないや。ついでに交換しよ?」

「お、おう」

なんかその後も一条やら色々交換して連絡先が増えました。

そしてデート当日

「お待たせ！比企谷くん！」

「おう。今来たばかりだから気にすんな」

このセリフ1回言つてみたかった！

「そう？ならよかつた」

「……それと……ふ、服にあつてるぞ」

「あ、ありがとう……」

『……』

ほらーー！やつぱり黙つちやつた！あれはイケメンだけの特権なん
だよ！

「じゃあ行くか」

「うん」

今日はショッピングするらしい。女子と来ればいいのに。

「これどうかな？」

「いいと思うぞ」

「じゃあこつちは？」

「あーうん、いいぞ」

「それともこつち？」

「おーそれもいいな」

「……比企谷くん聞いてないし見てないのになんで良いってわかるのかな？」

「す、すみません……で、でも俺のセンスで判断してもろくなことにならんぞ？俺センスないし」

「大丈夫、私は比企谷くんに選んでほしいから」ニコツ

…… そういうセリフや笑顔が勘違い男子を生むんですよ。

…… ジやあ、右、かな

「わかつた！ ジやあこれにするね！」

「ほんとにいいのか？」

「いいの！」

「比企谷くん何食べる？」

「じゃあこのカルボナーラでいいや」

「あーそれも美味しそうだよね！ 私はこのナポリタンにしようかな」

「おっ、なかなかいける」

「でしょ？ このお店美味しいんだ！ このナポリタンも美味しいよ

？ 食べる？」

「い、いや別に……」

「はい、あーん」

な、何をしてるんですかこの子！？

「お、おい小野寺？」

「ん？……！ わ、わわ私何を！」

「じ、自分で食えるから大丈夫だぞ」

「あ、う、うん……」

なんか惜しいことをした気がする。

「比企谷くん、今日は楽しかった？」

「……まあつまらなくはなかつたぞ」

「ふふつ、それなら良かつた……ちょっと寄りたいところあるんだけ
どいい?」

「ああ」

「(+)の道を抜けるとね……」

「……へえ、こんな場所が……」

小野寺についていくと凄く景色のいい場所についた。丁度夕陽が
落ちる時間帯なので眺めも絶景だ。……この景色どつかで見たこと
あるような……

「(+)、私しか知らないんだ」

「そんな場所教えてよかつたのか?」

「うん!二人だけの秘密だよ?ハチくん」

ドクン

……!!!お、思い出した……

「な、なあ小野寺……俺達つて1回あつたことあるか?小学生の時
とか」

「うん……あるよ」

「……全部思い出した。……寺ちゃん、だよな?」

「!!うん!やつと思い出してくれた!ハチくん!」

「どわつ!お、小野寺いきなり抱きつくな!」

「(+)、ごめん……」

「……でもまさかあの寺ちゃんだったとは……」

「私ハチくんが転校してきた時すぐに気づいたのにハチくん気づいて
ないんだもん」

「す、すまん」

「……それと昔私の前からいなくなつたのつていじめをなくすため
なんだよね?」

「……あ、ああ。勘違いじゃなければそれなりに仲いいと思つてたか
らな。転校のこと伝えたらきつと止めると思つて」

「……そつか。寂しかったんだよ?」

「すまん……」

「……でもこうしてまた再会できたしいいかな！」

「……あのさ、もしかしてこれからハチくんって呼ぶのか？」

「え？うん」

「今まま苗字で呼んでくれないか？」

「……どうして？」

「いや、ちょっと色々とめんどくなりそうだからさ」「

一条とか一条とか一条とか。

「……よくわかんないけど、わかつた。それにいきなり呼び方変えるのもなんか恥ずかしいしね。あらためてよろしくね！比企谷くん！」

「……おう。よろしくな小野寺」

こうして俺たちは本当の再会を果たした。
続く

小野寺との“デー・・・ショッピングから数日後、またうちの学校に転校生が来た。名前は鶴誠士郎。なんでも桐崎のボディガードらしい。そして名前と男子制服を着ているということもあり、最初は男かと思つたが実は女だった。なんか一条と桐崎の関係を疑つてここに転校してきたりしい。まためんどくさいことになりそうだ。

そしてさらに数日後、今日から俺達は林間学校に行く。
俺にとつては苦痛でしかないな。

「楽しみだね、比企谷くん」

今はバスに乗つてゐるのだが、何故か隣は小野寺。一条と隣になればいいじyan。寝ようと思つたのに。

「まあそうだな」

「私は昨日楽しみで全然寝られなかつたんだ」

「だからか？お前目の下にくまあるぞ？」

「え？ほんとに？」

「今日は絶対疲れるだろうし今のうちに寝といた方がいいぞ。ついたら起こしてやるから」

「…うん、わかつた」

「…うん、わかつた」

「ちよ、小野寺なにやつてんの？」

「え？…だ、ダメだつた？」

「い、いやダメじゃねえけど…」

いやですね？ただでさえ席隣で近くて女の子の香りとか色々あつて緊張してゐるのに。

「スー…」

…もう寝てるし。まあでも俺も珍しく昨日はあまり眠れなかつたんだよな…少し寝るか。

「舞子、今からちよつと寝るからついたら起こしてくれ」

「ん？おつけー！」

「はちまーん」

「ん……ついたのか？」

「ああ。それより感謝してくれよ？寝てる時も2人で寄り添つて寝てる感じだつたし。今の二人の状況で小野寺先に起きてたら……」

俺は一人の状況を見てみる。……なんで俺小野寺と手繋いでんの？

つていうかやわらかい！なんでこんなに柔らかいの！？

「つ……すまん。恩に着る」

「いひつてことよー！」

危ない危ない。危うく小野寺に怒られるところだった。

「小野寺、起きろ！」

「んつ……」

起きない……

「おーい」

「あつ……」

……ちよつとまつて。なんで起こしてただけでこんな工口い声

出すんだよ。男子高校生には刺激が強いからやめて！

「おい小野寺」

「んん……あれ？ついたの？」

「ああ。もうみんな外出てるぞ」

「じゃ、じゃあはやくでないと！」

「よし、それじやあ女子は薪をとつてきてくれ！料理できるやつは俺と食材の準備だ！」

今からカレーを作るのだが一條が急に仕切り出した。なんか目が燃えてる。俺は適当に野菜切るか。ここで俺の料理スキルを見せてやろう。

……俺なんて……一条うますぎだろ。聞いたら家人達の分全員作つてるらしい。勝てませんねこれは。

「な、なあ比企谷！」

「どうしたんだよ、慌てて」

「さ、さつきたまたま見ちまつたんだが桐崎のやつ、鍵持つてたんだよ！」

「…いや、鍵なんて持つても別に不思議はないだろ」

「このペンダントだよ！明らかに家の鍵とは違った。桐崎が持つてたのはこのペンダントの鍵なんじやないか？」

「…さあな。俺に聞かれてもわからん。とりあえず今はカレー作ろうぜ」

「え？ああそうだな」

そして俺達は今日泊まる予定の旅館に来た。

「結構豪華だな」

部屋はなかなか綺麗だった。それより、なんで男女合同の部屋なんだよ。いや仕切りはあるけどさ。まあ女子が小野寺たちだからいいけど。

「うちの学校こういうところは気前いいからね～」

「どうする？時間あるけど」

「ふつふつふ…」そういうこともあると思つて、トランプを持つてきました！これで遊ぼうぜ？まあ普通にトランプするのもあれだから、負けた人は罰ゲームはどう？」

「内容は？」

「いい質問だねるりちゃん！負けた人は自分のスリーサイ：ぐふつ！」

「OKがでるとでも？」

「じゃ、じゃあ今日の下着のい…ぐふう！」

「ま、い、こ、く、ん？」

「…なら初恋のエピソードを語るとか…」

「まあそれなら」

「ふあっ!?なんだと!?俺の恋愛…ことなんて黒歴史だけだぞ!?

…これは負けるわけにはいかん。

続く

9話

ということで始まりました、ババ抜き。

少し雲行きが怪しくなってきた。鶴、宮本、舞子が先に上がり残りは俺、小野寺、一条、桐崎の4人。

そして俺の番なのだが……

「……」パアツ

……こつちか？

「……」ズーン

……やつぱりこつち……

「……」パアツ

無理！俺が引く相手は小野寺なのだが、明らかに顔でわかっちゃう！

俺はあと一組揃えば上がりだ。小野寺の持っている二枚のカードのどちらかがもしかしたら当たりかもしれない。でも小野寺の顔でもうジョーカー持ってるのわかっちゃうんだよな。というかもう色々表情が変わつてもうなんか可愛い。こんなこと絶対言わんけど。……まあまだ4人だし。

「……」スツ

俺は小野寺の可愛さに負けてジョーカーをひきました。

だが、これで小野寺が上がつたことで俺は手加減しなくてすむ。

ここからは俺のターン。

「……」

「比企谷、これジョーカーか？」

「さあ

「こつちか？」

「ふーん」

「くつ……これだろ？」

「ほお！」

「だあー！わからん！比企谷、ポーカーフェイスうますぎだろ！」
ふはは！これが俺の実力だ！

「これだ！……」ズーン

「ふつ、一條のやつジョーカーひいてやんの！これで俺はあと1枚。

「これかな……おつあがり」

「これで残りは楽と桐崎さんだね！」

ふう危ない危ない。

結局桐崎が負けたんだが運のいいことに入浴時間になり罰ゲームは消滅した。

久しぶりだな、温泉なんて。

「……ん？ 一條先入つてたのか」

「おう、比企谷か。集達ももうすぐくるぞ」

「ふうう……いい湯だ」

「比企谷、おっさんみたいだぞ」

「こういう時くらい別にリラックスしてもいいだろ」
俺達が雑談してると、誰か入ってきた。

「おつ、集か？」

「ここ意外と広いのね！」

「ほんとだね！私温泉はいるの初めてだから楽しみだつたの！」

「小咲ちゃんも？私もなのよ！」

……この声つて……

「はやく洗つてお湯に……」

「？どうしたの？千棘ちゃん……」

……目の前にいたのは小野寺と桐崎だつた。……どゆこと？
「な、な、な……」

「なんであんたらいるのよ！つてかこっち見んな！」

「す、すまん！っていうかここ男湯だぞ!?」

「はあ!? ここは女湯よ！」

「なに!? 俺ちゃんと確認したぞ！」

「……わかつた、きつとクロードの仕業だわ」

……確かにあいつならやりかねんな

……クロードって誰？俺と小野寺置いてかれてるんだけど。

「とにかく、あんたら早く出なさい！バレたらただじやすまないわよ
？とくに鶴とか」

「あ、ああ。すまん桐崎！小野寺！いくぞ比企谷！」

「え？あ、おう……」

ガラガラ

「おーいい景色だな」

「ほんとですね」

「……まあ、ほかの女子まで入つてきた。

「げつ、みんな来ちゃつた！小咲ちゃん！こいつら隠すわよ！」

「う、うん！」

「……どうしよう。見つかってしまうかもという不安もあるけど、
小野寺との距離が近くてもう心臓バクバク。タオルまいてるだけだ
から……」

時々生足とか当たつてるんだよ。……女子つてなんでこんな肌白
いんだ？」

「……ひ、比企谷くん、あんまり見られると恥ずかしいよ……」

「す、すすすまん」

「……出る気配ないわね。あんた達、私たちがサポートするからなん
とか逃げ出しなさい」

「なんとかつて……」

とにかく探すしかない。……ん？あれは！

「おい、あそこに穴あるぞ。男湯に繋がつてるんじゃないか？」

「ほんとだ！いこう！」

「あそこね。いくわよ小咲ちゃん」

「う、うん」

バレないよう、そつと……

「ん？小咲達そんなどこにいたの？」

「る、るりちゃん」

「なんでそんな隅にいるのよ」

「えつ!?な、なんとなくだよ、あはは……」

「お嬢！お嬢もそんなところにいないでこちらへ！」

「ちよ、きちゃだめ！」

ま、まずいぞこれは。

「あんた達先行きなさい！ここは私たちがあしどめするから！」 ボ

ソツ

「わ、わかつた！」 ボソツ

というかこれ息がやばい。早くしないと…

「そうそう！今恋愛トークしてたんだけど、桐崎さんとか一条くんとどうなの？」

「え？ふ、普通よ普通！」

「えー？気になるなあ」

「ほ、ほんとになんでもない… わつ」

バシャン

うおつ、桐崎のやつこけやがつた。一条のやつ大丈夫か？というか早くどけ！息が！

(比企谷！こつちだ！)

(おう！)

「えー？じやあじやあ寺ちゃんは!?好きな人いないの？」

「わ、私!?私はいないよ？」

「寺ちゃんも怪しいなー」

「そういうえば前気になる人いるって…」

「る、るりちゃん!？」

「ほーほー、これは詳しく…」

「…」

「あー！逃げるなー！」

「い、いないつてばー！つてわつ!?」 ツルツ

バシャン!!

うわ!?また誰か転んで…

チュツ

「つ!?」

「?」

「それで、見たの？」

「み、見てないぞ？湯気でほんと。な、なあ？比企谷」

「え？あ、おう」

「じゃ、じゃあダーリン、最後のは？」

「最後のつてなんだよ？」

「つ、最後の……俺が穴を通る寸前に口に来た感触つて……

「……ならいい」

「お、小野寺もごめんな！」

「えつ!?だ、大丈夫だよ！き、氣にしてないから！」

「ほら、比企谷も！」

「え？あ、お、おう。すまなかつた」

「き、ききき気にしないで！私ももういくね！」

…… 小野寺のあの反応。…… やつぱりあの時。…… き、キスしち
まつたのか？
小野寺と。あの顔は小野寺もわかつてるよな。…… どう思われて
るんだろうか。嫌われなきやいいけど。

翌日

「お、おはよう比企谷くん」

「ん？あ、お、おう」

これは嫌われるとかそういう問題じゃないわ。俺がまともに話せ
ない。

というかなんか一條と桐崎の様子もおかしいな。…… まさか桐崎
が転んだ時に俺と同じことが？まあそれはないか。

というかどうしよう。小野寺とともにこれから話せるかな。

続く

そして時間もすぎ、肝試しの時間となつた。

ちなみにこの肝試しは男女ペアで、決め方はくじ引きである。

まあつまり、運が良ければカツプル誕生、なんてこともあるのかかもしれない。リア充爆ぜろ。

「楽、もし小野寺のと同じ番号当たつたら欲しいか？」

「……五百円で買おう」

「おつけー！」

俺は誰とペアになるのだろうか。なるべく知ってる人が……ってそれ4人しかいないわ。……でもちよつと小野寺と一緒に時は今は恥ずかしくて無理。会話もまともにできないから。

「よし！ いつてくるー！」

「頑張れー！」

まあここだけは一条が小野寺とペアになることを祈つてやろう。

俺つて超優しい。

「……」

「どうだつた？ 楽」

「…… 桐崎とだつた」

「おっ、すごいねー。やつぱり相性いいんじゃない？」

「だ、誰があんなやつと！」

「ま、もし俺が当たつてもそのペアをかえちゃうと誠士郎ちゃんあたりに怪しまれるかもしれないしかえるのは無理だね」

「くつ……」

「ま、桐崎さんらしいじゃない！ あわよくばイチャコラできるし

「するわけないだろ！」

「あはは！ ん？ 次八幡だぞ？」

「え？ おう。いつてくる」

「おー、八幡運いいな。小野寺となんて」

……マジデ?

「……！」ブイツ

……今小野寺の方見たら顔そらされたし……はあ。

結局ペアは一条と桐崎、舞子と宮本、鶴はなんか女子と同じになつたらしい。どゆこと?そして俺は小野寺と。

『……』

うん。非常に気まずい。本当は肝試し中は手を繋ぐんだが、みんな見えなくなつたら恥ずかしくてすぐ手放したし。あんなことあつたあとにまともに話せるわけないだろ!……これ絶対怒つてるよな。遅いかもしけないけどやつぱり謝ろう。

「……な、なあ小野寺」

「な、なに!？」

「……すまなかつた！」

「……え?」

「その……昨日の温泉で……事故とはいえ、小野寺と……き、キスを……」

「……」カアアア

ほらーー!また顔赤くなつて怒つてるよ。許してもらえるのだろうか?

「……本当にすまなかつた。許してほしい」

「……じゃあ一つだけ質問に答えて?」

「ああ。なんでも答える」

「その……比企谷くんは私として……そのい、嫌だつた?」

え?何その質問。これの答えで許されるかどうか決まるよな。

どつちを答えればいいんだ?……うーん、わからん。自分の正直な気持ちをいうしかない。

「……ま、まあ嫌ではなかつたぞ」

「ほ、ほんとに?」

「ん?あ、ああ」

「……そつか。……比企谷くん、私も嫌じやなかつたよ?」

……は？

「そ、それってどういう……？」

「さ、早く先進もう！」ギュッ

「あ、おい！」

「……♪」

……まあなんか小野寺の機嫌良くなつたっぽいしさつきの答えで良かったのか？

「おつ、八幡たちもかえってきた！」

「？小咲、あんた何かいいことでもあつたの？」

「ん？ううん、別に？」

「くつ、比企谷羨ましいぞ！」

「お前の運がなかつただけだろ」

「くそ……千棘のやつ、怖がりらしくてよ。進むの大変だつたぜ」「なつ！し、仕方ないでしょ！怖いもんは怖いんだから！楽だつて時々びびつてたじやない！」

「お前ら名前呼びになつたのか？」

「え？あ、おう。前よ付き合つてるのに名前呼びじゃないのかつて言われてさ。だからいい機会だしかえるかつてなつて。そうだ。比企谷とも名前呼びにしようぜ！集だつて名前で呼んでるんだし！いいだろ？八幡」

「俺もそろそろ名前で呼んでくれると嬉しいかな～」

「……はあ。わかつたよ。楽、集」

『おうー…』

俺なんかがこんなリア充みたいな生活を送つていいくのだろうか？

なんか後から嫌なこと起きそうな予感がする。

「比企谷くん、早くバスに乗ろう？」

「ああ」

……まあでも今回くらいはいい、かな。

続
<

「みなさん、集まつていただいたのは、今週の日曜日は千棘お嬢様の誕生日なんです。それで誕生会を開くのですが、小野寺様たちも招待したいと思いまして」

突然、鶴から集められ、告げられた。桐崎って今週だつたのか。

「なあ、集のやつはいいのか？」

「なんのことでしょう？」

「……」

存在すら消されてるよ。

「じゃあプレゼント用意しなきや！ るりちゃん前日の土曜日一緒に買
いに行こうよ！」

「あ、ごめん。私もう誕生日プレゼント用意してあるから、比企谷く
んど行つてきて」

「え？ るりちゃん、千棘ちゃんの誕生日知らないはずじゃあ……」

「いいからいけ」

「いたつ？ ……ひ、比企谷くん、いいかな？」

「ああ。いいぞ。俺も用意してないし。それに俺のセンスじや変なの
になるからな。小野寺選んでくれ」

「ダメだよ！ ちゃんと自分で選ばなきや！ 千棘ちゃんきつと喜んでく
れるよ」

「わかつたよ」

そして、誕生会前日。

俺と小野寺は今電車に乗つている。

「なあ、近くのショッピングモールじやダメだつたのか？」

「前新しくオープンしたから行つてみたくて……ごめんね？ 嫌だつ
た？」

「いや、別にいいけど……」

「土曜だから人多いな。まだ数駅着くまであるし……」

その時、電車が揺れた。

「おわっ」

「きやっ」

「… すまん大丈夫か？」

「う、うん」

というかこの状態恥ずかしいんだけど。人多いので小野寺に角に行つてもらつたんだが、今はその小野寺をいわゆる壁ドンしている状態だ。距離も近い。

「また入ってきたな。小野寺つめるぞ」

「う、うん」

小野寺との距離がさらに近くなる。あと数センチ詰めれば触れてしまいそうな距離だ。

駅を通過する事にどんどん人が増えてくる。

「ぐつ…」

人多すぎだろ！もう小野寺と密着してゐるし！小野寺顔赤くしちゃつてるし。

「す、すまん」

「だ、大丈夫だよ」

いや、そうは言うけど顔赤いじやん。俺も赤いだろうけど。

その時、また電車が揺れた。

「おつと」

「んつ…」

「す、すすすまん！」

まずい。今の揺れで俺の足が小野寺の足と足の間にある。小野寺の方が小さいので、当然俺の足の方が長い。つまり膝が曲がつてゐる状態なんだが…：

「んつ…ひ、比企谷くん…足どけて…」

いやこれはまじでやばい！小野寺のスカートの中に膝が当たつているから…この先は言えん。

「そ、そんなこと言われても…人多すぎて」

「あつ…んつ！」

こ、これはエロい。俺今小野寺と密着状態なのでもう耳元で囁かれてるようなもんだ。収まってくれ！俺の息子よ！

ギュウツ

「お、小野寺！」

小野寺が抱きしめてきた。柔らかいのが当たつてるから！

「あ、足… ゆらしちゃだめえ…」

「ゞ、ゞゞゞめん！すぐどけるから！」

さすがに俺もやばいので足を頑張つてだけようとする。

「んつ… う、動かさないでえ…」

だめだ！動かしたら余計にだめだ！早くついてくれ！俺の理性が

！

「ハアハア… やつとついた。小野寺大丈夫か？」

「う、うん大丈夫…」

「… とりあえず行くか」

その後、俺たちはすぐにプレゼントが決まり帰路についた。

正直、プレゼント買いに来たというよりは遊びに来たようなものだつた。プレゼント決まつたあとゲームセンターとかいつたし。

「喜んでくれるといいね！」

「ああ」

そして、桐崎の家

「ようこそ、みなさん」

「おおきいねえ…」

「?」

桐崎はすごく驚いた顔をしている。そういうこのメンツ… ギヤングか何かか？

「千棘ちゃんお金持ちだつたんだね！」

「え？ う、うん。まあ」

その後俺達はプレゼントを渡した。楽のやつがなんか桐崎に似た

ゴリラのような人形を渡していく笑いそうになつた。俺よりセンスないだらあいつ。

そしていまはパーティを楽しんでいる。

「ふう… ちょっと休憩… ん？」

外で桐崎と一条がなにか話している。

「ザクシャインラブって知つてる?」

「… ん? なんの話だ?」

「な… そ… を」

聞こえづらいな。ん? 今度は一条がペンドントを取り出した。

… は? 桐崎のやつなんで鍵を…

ポキッ

あ、折れてる。

… どういうことだ? 桐崎も鍵を持つていた。小野寺と似たような鍵を。つまり、一条、俺、桐崎、小野寺は昔あつてていたということになる。… 二組のペアができるってことか? ジやあ俺の持つているペンドントも小野寺か桐崎のどつちかの鍵と当てはまるということになる。

… うーん、気になる。

続く

12話

桐崎の誕生会が終わり、数日後、なんとまた転校生がやってきた。

転校生のバーゲンセールだな（白目）。

名前は橘万里花。樂の幼なじみで十年前に約束した女の子のうちの1人らしい。つまり俺とも面識があるわけで、橘は俺のことも覚えていた。まあ俺は覚えていないんだけど。名前でいきなり呼ぶのはやめていただきたい。心臓に悪いから。ちなみに橘は樂にぞつこんだ。

いつもベタベタしてる。爆ぜろ。さらには許嫁らしい。

もうまじで爆ぜろ。

「おーい、樂、八幡！修学旅行の写真集出来上がったらしいから見に行こうぜ！」

「おう！」

修学旅行ねえ……なにもなかつた。うん。なにも。

「意外と量あるな」

「困るなくなるべくたくさん欲しいよね」

「まあな」

「あ、小咲！これなんてどう？」

そこにあつたのは俺と小野寺が手を繋いでる写真だつた。しかも結構アップで撮られてる。いつとられたんだよ。

「な、なかなかいい写真ないね！」

「いや、これは？……せつかくだし買うか」

「え？……じゃ、じゃあ私も買おうかな」

よく考えたらこれ結構恥ずかしい。

「そこの旦那！」

「なんだよ集」

「うちの商品見てつてくださいよ。ここでしか手に入らない写真だよ！俺が求めるのは女の子のちょっぴり恥ずかしいショットのみ！ほら樂と八幡も」

「一体なんの……」

「……」

これは。小野寺の寝顔写真。というか俺と一緒に寝てた時のだし。
あ、語弊をうむね今の言い方。…… 買おうかな。

「ちなみに一枚500円だよ」

「買おう」

「俺も」

「毎度あり~」

集のやつ一体どこであんな写真とつてたのやら…… ん?これつ
て……

「ぶつ!？」

ちょっと待て。この桐崎が写つてる後ろにいるの小野寺じやねえ
か!しかも着替え中だし! ダメでしょこれ!

「…… 先生のとこ持つてくか」

「あれ? 比企谷くん? まだ決まつてなかつたの?」

「げつ、小野寺」

「? 何隠したの?」

「い、いや何も隠してないぞ?」

これはバレたらまずい。男子に下着姿見られるなんて嫌だらうか
らな。

「え? でも今……」

「ほ、ほんとになんでもないぞ? うん。俺ちょっと職員室いくから!」

「あ…… 今の写真…… 千棘ちゃん?」

数日後

「一条くん」

「ん? どうしたんだ小野寺?」

「実はうちの店のアルバイトの人が休んじゃつて、今人手不足なの。
一条くん前料理上手つていつてたよね? それでもしょかつたら明日
だけ手伝つてほしいんだけど……」

「おう! いいぜ! …… つて、あーすまん。俺明日用事あるんだ」

「そつか…… 困つたな」

「そういうや八幡前家で家事してるとかいってたよな?」

「え? いやでも俺一条ほどじやないぞ? そんな何10人分も飯作らんし」

「比企谷くん、お菓子とか作つたことある?」

「まあ時々な。妹が食べたいって言つた時は」

「……うん。比企谷くん、お願ひします!」

「えへへへ..

「少し手伝つてくれるだけでもいいの!」

「……わかつたよ」

「ほんとつ!? ありがとう!」

…… 素人に和菓子屋のアルバイトなんて務まるのだろうか。

続く

13話

ということで、今日は和菓子屋オノデラでバイトの日だ。
めんどくさいなあ……まあ歩いて数分だから遠くはないんだけど
さ。

……よし、いくか。

「……すみませーん…… 今日バイトで来た……」

「なんとか間に合わせなさい！わかつた!?…… つたく…… ん？なに
坊や？何か用？」

「え、えつと…… 今日小野寺さんに頼まれてバイトに来たんですけど……」

「バイトお？そんなの頼んでないけど…… 訳わかんないこと言つて
ないで坊やはおうちに帰つてミルクでも飲んでな」

……ええー…… 何この人。つてここ小野寺の家なんだから小野
寺さんじや皆そうだもんな。

「えつと、こ、小咲さんに頼まれて……」

「小咲？あんたみたいなゾンビくんが小咲と知り合いとは思えないん
だけど……」

人は見た目で判断しちゃいけないんだぞ！

「お、お母さんストーップ!!」

「あら、小咲。あんたこのゾンビくんと知り合い？」

「お、お母さん失礼だよ！比企谷くんは私が手伝つてもらえるように
頼んだの！」

「この子が？…… 料理できるの？」

「一般的なことなら…… 和菓子は作つたことありませんけど」

「……はあ、まあ今は緊急だし、比企谷くだつけ？どのくらいの腕
かみたいから簡単なもの作つてもらうわ」

「え？は、はい」

「が、頑張つて！比企谷くん！」

……何作ればいいんだよ…… とりあえず昨日勉強した饅頭作
るか。

「……え、えっと、できました」

「…………」

小野寺母は値踏みをするように饅頭を見つめている。

そして、口に運んだ。

「……ほおー、これは……比企谷くん、下の名前は?」

「は?……八幡ですけど」

「八幡くんね。あんた小咲のお婿になりなさい」

「ぶつ!?

「は?」

「お、お母さん!な、何言つてるの!」

「いやあ、初めてでこれだけできれば十分だわ。もしかしたら春並に
うまいかも」

春?誰だ?どつかで聞いたことあるような気が…

「ま、とりあえず今日はなんとかなるわね。私は裏でやることあるか

ら小咲、餡の作り方教えてあげな」

「う、うん!じやあやろう!比企谷くん!」

「ここはこうするんだよ」

「なるほど……小野寺は作つたりはしないのか?」

「うん、このくらい簡単なのならできるんだけど、最初から最後までや
るとなんか失敗しちゃうんだ」

「へ、へえ……」

「だから代わりに私は……ほら!」

「ほお……こりやうまいな。飾り付けだけでここまでなるのか。ま
るで芸術作品だな」

「えへへ、そうかな?私これだけは得意なんだ」

「これだけできれば十分だろ。いくら料理まずくともこれならみんな
買うわ」

「ほ、褒めすぎだよ。じゃあそろそろ本番行こつか。……これを運ん
で……よつと」

「俺持つぞ」

「大丈夫大丈夫……きやつ!?

「つ！」

俺は小野寺が転びそうなところでなんとか後ろから支えた。

「大丈夫か？」

「う、うん、ありがとう」

「小咲……あらあら、いつの間にそんな仲良く……」

「お、お母さん？… つ！」

「す、すまん！」

「やつぱり八幡くん小咲のお嬢に…」

「お母さん！」

「うふふ。小咲、そろそろ店番お願ひ」

「わ、わかった！」

「八幡くんもね」

「え？俺も？」

「いらっしゃいませ！」

「いらっしゃいませ…」

「ほら、もつと笑顔で！」

「い、いらっしゃいませ」

「…」

「おい、明らかに引くんじやない」

「あ、あはは…」

「八幡くん、これかけて」

「？眼鏡？」

「その目、特徴的だからね。怖がつちやうお客様もいるかもしね
いから」

「はあ…」

「おおつ！これは… 小咲似合ってるわよね？」

「…」

「小野寺？」

「へ？あ、う、うん！すぐ似合つてるよ！」

「さ、さんきゅ」

「小咲、今見惚れてたでしょ」

「つ！み、見惚れてないから！」

「うふふ、これは今後に期待ね。あ、あと私これからちょっと外でなきやいけないから店番よろしくね。小咲、2人きりの今がアピールチャンスだよ」

「も、もう！早くいって！」

「はいはーい」

「……結局にあつてるんだよな？」

「いらっしゃいませ！」

「お、今日は小咲ちゃんが店番かね」

「あ、田中さん」

「小咲ちゃん、今度わしとデートでもいかがかな？」

「あはは、私じゃもつたいないですよ」

「いやいや、小咲ちゃんすごい美人じやよ？……あー、もう彼氏さんがおつたか」

「へ？……は、ハチくんはそういうのじや！」

「ええのう、青春じやのう。彼氏さんや、小咲ちゃんみたいな美人さんそういうからしつかり捕まえとくんじやぞ」

「い、いや小野寺と付き合つてるわけでは……」

「今日は小咲ちゃんのためにいつもより多めに買おうかの！」

「ありがとうございました」

「あのじいさん、1人で勝手に納得して帰つたな」

「あ、あはは……で、でもこうして2人で働いてると夫婦みたいだね」

「ぶつ！お、小野寺!?」

「ん？……つ!?わ、私今な、なにを!?わ、忘れて！今の！」

「あ、ああ……」

「……小野寺と夫婦ね……悪くないな。まあそんなこと有

り得ないけど。

「そろそろお店しめよつか」

「おう」

「今日はありがとね」

「別にいいぞ。これくらいだつたら……うわ、すげえ雨降つてる：

「え?... ほんとだね。あ、電話... お母さん? うん...ええ!?

う、うん。わかつた」

「なんだつて?」

「お、お母さんこの雨で帰つてこれないつて。... それで比企谷くんには泊まつてもらえつて」

「... は?」

続く

「……えつとすまん、もう一回言つてもらつてもいいか？」
「だ、だからこの雨だから泊めてあげなさいって……」
「……うん、ごめん。二回言つてもらつても意味わからん。
「いやいや、まずいだろ」「で、でもこの雨だし……」
「いや、さつき見た程度なら頑張れば帰れ……」
「ザアアアアアア!! ゴロゴロ……」
「……やつぱり泊めてもらつていいか」「う、うん!とりあえずお店片付けよつか!」「おう」「……え? まじで泊まるのこれ? 僕と小野寺ふたりつきりで?」
「……まあ俺に狼になる勇気なんてないけどね。小野寺は嫌じやないのか?」
「よし、終わり! えつと、じやあこれからどうしようつか? まず私の部屋に上がつてもらつて……」
「……え? いいのか小野寺の部屋で」
「……え! う、うん! でもちよつと待つて! 片付けるから!」
ガタガタ!!
めつちゃ片付けてるよ。別にリビングとかで良かつたのに。
「い、いいよ!」「……」
小野寺の部屋に入つてからといふものの、ずっと沈黙が続いている。
いや、こういう時つて何話せばいいわけ? なんか小野寺も俯いぢやつてるし……
「あー、やつぱり帰ろうか? 男と2人きりなんて嫌だろ?」「え? ううん! 比企谷くんなら大丈夫だよ」「……なんかそれはそれで男として見られてないような気が。」

「そうか？でもこれからどうするんだ？」

「んー、あ！アルバムでも見る？」

「それなら少しは話の種になるな」

「この頃のりちゃんと仲良くなつたんだ」

「へえ、長い付き合いなんだな。俺はずつとぼつちだつたわ」

「……私は？」

「え？あ、ああ。小野寺はと、友達だぞ？引つ越してからぼつちつてことだよ」

「友達とか作ろうとは思わなかつたの？転校生つて最初は注目されでしょ？」

「最初だけな。でもすぐに静かになる。まあ別に不便なこともたいしてなかつたしな」

「そつか……あ！そういえば小学校の頃のアルバムもあるんだ！……えつと、あつた。これ」

「いや、俺写つてないだろ……」

「そう思うでしょ？でもね……ほら」

そこには小野寺と2人で写つている写真があつた。

「こんな写真いつとつたんだ？」

「分からぬけど、よく撮れてるよね」

「ほんとだな。この俺はあんま日腐つてないわ」

「ふふつ、そうかも……ねえ、比企谷くん」

「？なんだよ？」

「……2人きりの時は昔の呼び方じやだめかな？」

「い、いや昔の呼び方つてなんか小さい子に言つてるみたいで恥ずかしいし……」

「でもなんか比企谷くんつて呼んでるとなんだか距離が遠くなつちやつた気がして……」

「……八幡ならいいぞ」

「え？」

「名前だよ。ハチ君などなんか幼いからそのまま名前にしてくれ」

「……うん！わかつた！八幡くん！」

女子に名前で呼ばれるのってなんか恥ずかしいよね。俺だけか。「あ、あと私のことも2人きりの時でいいから名前で呼んでほしいな」「いやそれは……」

「……お願い」

「うつ……こ、小咲」

「つ……や、やつぱり恥ずかしいね」

「俺の方が恥ずかしいわ」

「あはは……あれ?……雨やんてる」

「……ん?ほんとだな。やつぱり帰るよ。妹も心配だしな:」

「うん」

「じゃあまたな、小野寺」

「……名前」

「あ……またな、小咲」

「うん!……八幡くん、ちょっと横向いて?」

「え?ああ」

チュツ

「おやすみなさいつ、八幡くんつ」

「……はえ?俺今何された?……俺今日眠れんかも。

その頃小野寺は

「くつーわ、私は、八幡くんにき、ききキスしちゃつたく!!!!
学校で顔合わせられないよお!」

続く

15話

はあ…… 小野寺の昨日あんなことあつたから顔合わせられんな。
どうしたもんか。

俺は重い足取りで下駄箱へ向かつた。

「…… ん？ 紙切れ？」

靴箱を覗くと、1枚の紙が入つていた。…… も、もしやこれはラブレター!? ってそんなわけないか。とりあえず中身は…… 小野寺小咲に近づくな? あー…… イタズラかなにかか。小野寺人気あるしな。ほかの仕掛けは…… してないみたいだな。とりあえず様子見るか。

「あっ、おはようはち…… 比企谷くん！」

ちょっと今名前いいかけましたよね! やっぱり名前呼び許可しない方が良かつたかな……

「うつす、こさ…… 小野寺」

俺も間違えそうになつたよ。ほかのヤツらは気づいてないみたいだな。

「……」

いや宮本がめっちゃこつち見てる…… あ、違う方向いた。

「おっ、はつちまーん! 楽がよー!」

「あああ! 言いふらすな集!」

そしてこいつらはいつもうるさいな。落ち着きを持つてほしい。落ち着きを。

とりあえず席につくか。靴箱は紙切れだけだつたが机は…… 何もなし。

ただのいたずらか?

帰り

結局今日は特に何も無かつた。気にする必要もなかつたか?

「…… いって…… 画鋲」

帰ろうとして靴を履き替えようとすると、靴の中に画鋲が散らばつていた。そしてまた紙切れも。

…… 小野寺小咲に近づくな。またか。こりやあ日に日にエス

カレートしていくパターンかもな……やはり俺が誰かと仲良くなるのは無理だつたようだ。あいつらとの関係もゼロに戻した方がいいな。危害があいつらに及ぶ可能性もある。

翌日

「おはよう比企谷くん！」

「……」

「あれ？ 比企谷くん？」

「……」

「ちよつと比企谷くん、小咲が挨拶してるじゃない。返したらどうなの？」

「……おはよう。あと、もう俺には関わるな。小野寺だけじやない。宮本も、一条も、舞子もだ」

「……え……」

「お、おい八幡それどういう意味……」

俺は一条の言葉を無視して席に座る。

「授業始めるぞー席につけー」

いいタイミングだ。これでおつけー。あとは授業終わつたらすぐ教室を抜けて授業始まる頃に戻つてくればそれでいい。そのうちあいつらも諦めるだろう。

帰りは捕まりそうになつた。だが俺の席は廊下に一番近い位置だから何とか逃げた。

「……」

また下駄をあけると……ゴミが大量に落ちてきた。靴の中にもたくさんの中鉢が入つていた。

もしかして朝ちよつと関わつただけでダメだつたのか？……
はあ。疲れる。

その後、俺が小野寺達と関わるのをやめると、イタズラはなくなつていた。これで解決だ。ただ俺がぼつちに戻つただけ。

また最近はベストプレイスに行くようになつた。一条のつるんでた時は一緒に食べてたからな。

「付き合つてほしい」

ん？あれは……小野寺？ともうひとりは先輩か？あー、告白中つてことか。

「ゞ、ごめんなさい」

「……どうしてかな？」

「えっとそのー：今は誰ともそういう関係になる気は無いんです」

「……好きな人でもいるの？」

「い、いえ！そういうわけじゃ……」

「ならダメかな？確かに俺と君はこれが初対面かもしれない。でも俺の評価は知ってるよね？付き合っても嫌な思いはさせないよ」

そういうやこの先輩確か学校で人気のやつだ。名前は……忘れた。

「と、とにかくごめんなさい！」

「待つてよ」

小野寺がその場から立ち去ろうとすると、その先輩は腕をつかむ。

「ね？いいでしょ？」

「は、離してください！」

はあ……1回断られたんだから諦めるよ……腹減った。

「おい、あんたもう諦めろよ」

「あ？……比企谷八幡」

ん？こいつ今俺の名前呼ばなかつたか？

「ひ、比企谷くん……」

「きみは誰かな？俺は今この子と話してるから向こうへ行つてほしいんだけど」

うわー爽やかスマイルですね。俺からしたら気持ち悪いだけだけど。

「さつきのたまたま聞いちゃいましたね。1回断られたんだから諦めたらどうですか？そんなしつこいと余計に嫌われますよ」

「なんだと？……ちつ。小野寺さん、俺は諦めないから

そう言い残すとその先輩は去つていった。

ふう、やつと飯が食べれる。

「ひ、比企谷くん！」

「……なんだ」

「あ、ありがとう。すこく困つてたから……」

「別に、俺はいつもここで飯食つてるから早くどいて欲しくてしただけだ」

「それでも、ありがとう」

「……わかつたから小野寺も早く教室戻れ。一条達も待つてるぞ」

「……八幡くん、何隠してるの？」

突然、小野寺が真剣な顔で訪ねてきた。まあそう来るわな。今まで普通に関わってきたのにいきなり関わるなどか言われたんだから。

「べつに何も隠してないぞ」

「嘘。じやあ八幡くんどうして急に私達から離れたの？何かあつたんじゃ……」

「嫌だつたんだよ。普通に話してるふりしてただけだ。本当はいやで我慢してたんだよ、あいつらとつるむのを」

「……八幡くんこんなこと昔もあつたよね。私達が小学生のとき、急に八幡くんが私のこと遠ざけて。あの時もいじめられてた。今回も……」

「違う。だいたい小野寺達も俺と関わる必要ないだろ。理由がない」

そう言つて俺は弁当を開ける。しかし中身はゴミが入つていた。

「は、八幡くんそれ……」

ちつ、体育の時にやられたな。まだ終わつてなかつたのか。

「……とにかく小野寺は関係な……」

「関係あるよ!!どうして相談してくれないの!?1人で抱え込んで、それじや八幡くんが傷ついていくだけだよ!」

「別に俺は傷ついてなんかない」

「嘘。八幡くん今すごく悲しい顔してる。辛いんでしょ?もつと私達のこと頼つてよ……」

そう言うと小野寺は涙を流した。傷つけないようにしてたのが逆に小野寺を傷つけていたのか……

「……小野寺、相談がある」

「！うん！」

そしてその後、一条達にも相談をして犯人がわかつた。まあほほ鶴とかのおかげなんだけど。それでもみんな協力してくれた。

そして犯人はあの時の爽やかイケメンだつた。

「あなただつたんですね」

「ばれちやつたか。それで？俺を殴るのかい？」

「そんなことしませんよ」

「なんでよ比企谷！こんなやつ1発殴らないと！」

「いい。こんなやつ殴る価値もない。とにかく、もう俺達に近づくな。そうすれば先生達に報告することもない」

「……ま、俺もこれでも受験生だしやめるよ。悪かつたね。それじゃ」

「なによあいつ！全く反省してないわ！」

「桐崎落ち着け。これで終わってくれれば一番いい」

「まあそういうけど……」

でもまさか桐崎がこんな怒つてくれるとは。意外と友達と思つてくれてるんだろうか。

「とにかく解決したし。パ一ツと今から遊ぼうぜ！」

「舞子くんはもうちよつと落ち着いたら？」

「えー？ノリ悪いなあ、るりちゃん」

「その呼び方やめて」

「よかつたね八幡くん」

「……，ああ」

翌日

下駄箱にも異常はなし、ほんとにやめてくれたようだ。

「ねえ比企谷くん」

その時、宮本が話しかけてきた。

「小咲知らない？あの子この時間ならいつも来てるんだけど……メールも返事なくて」

「小野寺？いや知らないが……」

その時先生が教室に入ってきた。

「よし席につけー。あれ？小野寺休みか？」

どうやら学校にも連絡は入ってないらしい。……嫌な予感がする。

ん？メール？……小野寺からだ。写真もある。……！？

そこに写っていたのは、ガムテープで口を抑えられ、手を紐で縛られてどこかに監禁されている小野寺の姿があった。

俺はその次の文書を読む。

小野寺小咲は預かった。比企谷八幡、1人で学校の近くの廃工場に

来い。

簡潔にその文章だけがあつた。

「ちつ！」

俺はすぐに教室を出て走り出した。

続く

俺は廃工場につきすぐに中へ飛び込んだ。

「小野寺！」

「！八幡くん！」

「来たか」

そこには写真にあつたとおり手を綱で縛られた小野寺の姿があつた。

そして、小野寺をこんな目に遭わせた張本人であるあの時の先輩がいた。

「やつぱりあんたか」

「ほんとに一人で來たんだね。馬鹿正直なやつだ。……まあいい。それで？君はどうするつもりだい？」

「小野寺を取り返すに決まってるだろ。さすがに俺もキレたぞ」

もう我慢の限界だ。ここまでの大糞野郎だつたとは。

「キレイたねえ……比企谷八幡、君はこの人数を相手に取り返せるのかい？」

そいつはそう言うと後ろから数人のいかにも不良っぽい奴らが出てきた。

……まあそれくらいは予想済みだな。

「あ、あとそこから動くなよ。動いたら小野寺小咲がひどい目にあうことになる。……おいお前らあいつを潰せ」

そう言うと、不良達は俺に殴りかかってきた。

「がはっ！」

いつてえ……これいきなり肋折れたかも。

「なんだよコイツ、超弱いぞ！」

その後も俺は羽交い締めにされた。

「ぐつ……」

「八幡くん!!!! も、もうやめてください」

「それは無理だなあ。俺の小咲に手を出したんだから」

「なにが俺の小咲だ……それはお前の妄想の中の話だろ」

「今はな。でもすぐに俺の女になるさ」

「なんだと……？」

「小咲ちゃん、こいつを助けたいかい？なら条件がある」

「条件……？」

「俺の女になれ。それならあいつを解放してやる。あ、でも行動で証明してもらおうかな。俺と今からやるんだ。君の意思で」

「て、てめえ！なにいつて……がはつ！」

「さあ？どうする？」

「………… わ、わかりました」

「おい小野寺！そんなやつの言うこと聞くな！」

「うるさいぞ」

俺が必死で呼びかけると腹をまた蹴られる。

「がっ！………… お、小野寺」

「ははっ、いい子だ。じゃあ縄を解くからまずは服を脱ぐんだ」

「…………」

小野寺は言われるがままになる。

「ぐつ…………」

その時

「八幡!! 小野寺!!」

「比企谷!! 小咲ちゃん!!」

樂、霧崎、集、宮本、鶴、そしてその後にもヤクザが数人いた。

「樂…………」

「遅くなつてすまん！今助ける！」

そう。俺はここにつく前、樂達にメールで救援を頼んでおいた。

さすがに一人で突つ込むほど馬鹿じやない。

「ちつ、なんだこいつら！おい！お前らあいつらを潰せ！」

「どうやら身の程を知らないようですね…………」

そう言うと、鶴は一瞬で不良達を一網打尽にした。

「これなら竜達いらなかつたな」

「まあいいでしょ。念のためよ」

「ちつ！動くな！お前ら！こいつがどうなつてもいいのか！」

何とか助かつたと思つたら、そいつは小野寺を人質にとつた。

「ほんとゲス野郎ね……」

「……お前らありがとう。ここからは俺がやる」

「八幡……おう！任せたぜ！親友！」

「あいつをぶっ飛ばしなさい！」

「男を見せろ！比企谷八幡！」

「小咲をお願い」

「八幡！終わつたら色々聞かせてもらうからな！」

みんなが背中を押してくれた。

「……ああ」

「動くなと言つただろ！」

「……お前だけは許さない」

「黙れ！ほんとに殺るぞ！」

「やつてみろよ」

「なんだと？……」

だがそいつはいつまでたつても小野寺を傷つけようとはしない。

「歪んでいるとはいえ、お前は小野寺のことが好きなんだ。ここまでするほどにな。だからお前は小野寺を傷つけられない」

「ぐつ……ちつ、ならお前を殺るだけだ！」

そう言うと突っ込んできた。

「今のお前なんて怖くもなんともねえ……よ!!」

「が……はつ……」

相手のナイフをよけ、俺はみぞおちに思いつ切りパンチを入れる。
そしてそいつは倒れた。

「八幡くん!!」

小野寺が駆け寄ってきた。

「すまん……遅くなつて」

「ううん。嬉しかつたよ」

そう言うと小野寺は俺を抱きしめてきた。

「……」

俺は小野寺を抱きしめ返す。

「……おーい、おふたりさーん、俺達もいるよー」「……忘れてた。

「一・二・三・四めんね！ いきなり抱きついで！」

「い、いや気にしなくていい」

「くう：／羨ましい」

聞こえてない。楽の声は聞こえてない。

「小咲ちゃん、服服！」

「えつ……！」

小野寺は忘れていたのか顔を真っ赤にして後ろを向いた。
「ねえ、そういうやつどうする？」

「警察にでもつき出すか。監禁罪とか色々あるだろうし。桐崎任せた」

「ええ？ 私！……はあ、クロード、お願ひ」

「承知いたしました」

「ねえねえ、そういうえば小野寺さんさつき八幡のこと八幡くんって呼んでなかつた？」

集が突然そんなことを言い出す。こいついうことは覚えてるんだよな。全力でこまかそう。

「……なんのことだ？」

「……あんた目が泳ぎすぎ」

「ぐつ……」

その後根掘り葉掘りはかされた。

「小野寺さんと八幡が小学生の時にねえ……」

「小咲、なんであんた言わなかつたのよ」

「い、いやあ話す機会もなかつたし……」

「おい八幡！ 聞いてないぞ！」

「うるさいぞ楽、俺これでも怪我人なんだから」
肋も数本折れてるんですけど。

「じゃあじやあ名前呼びつてことはもしかして……」

「集の考てるようなことはないぞ。ただし仲が良かつただけだ」「……」

俺がそう言うと、小野寺が腕をつねってきた。

「いたいいたい！……なんだよ」

「少しなんだ」

「……ま、まあまあ……かなり仲良かつたです」

「もうあんたら付き合えば？」

「る、るりちゃん!?」

「小野寺が…… 小野寺が……」

というかさつきまであんなことあつたとは思えない空気なんですけど。

「つてそれより八幡くん怪我は!?」

「ん？別にこれくらいなんでもない」

「男なんだからそれくらい大丈夫よ！ほら！」

そう言うと桐崎は俺の腹に軽くパンチしてきた。

「ぐつ……」

だが、今の俺にとつては軽くでも大ダメージだつた。

「あ、あれ？」

「……」

さようなら小町。俺は天国へ旅立つよ。

「は、八幡くん？八幡くーん!!」

続く

17話

ううつ……；ここは…… 知らない天井だ。
確か桐崎に腹パンされてから覚えてないな……
周りを見ると病室のようだつた。部屋がやたら広いのが気になる
が。

なんか周りに高そうな花瓶とかあるし。

「スウ…… スウ……」

……なんか近くから寝息が聞こえるんだけど。そしてさらには腕になにか柔らかい感触があるんだけど。

俺は恐る恐る横を見てみた。…… なんで小野寺が隣で寝てるの？

え、何この状況桐崎に腹パンされてそれから病院に運ばれたのはわかるよ？でもなんで小野寺が隣で寝てるんだよ。

「あ、おにいちゃん！」

その時、扉が開いて小町が入ってきた。

「起きたんだね！体大丈夫？」

「……ああ。心配かけたな。つてそれより今のこの状況説明してくれ

「あ、小咲さんね。いやまさかお兄ちゃんにこんな彼女さんがいるとは…… 小町的にポイント高いよ！」

「いやそういうことを聞いてるんじゃないんだよ」

「本当はね、小咲さんすごく心配してたんだよ。それでお兄ちゃんのそばにいたって言つたからなんとか許可をもらつてこうなつたわけ

「それでなんで隣で寝ることになるんだよ……」

「よかつたね！お兄ちゃん！」

「おーい、小野寺起きてくれ。小野寺ー」

「ンンッ……あれ？八幡くん；？なんでこんな近くに……

!!!

小野寺は状況を把握したのか顔を真っ赤にしてベッドから出た。

「ち、ちち違うの！最初は椅子で寝てたんだけど…え、えっと、そ、そ
う！私寝相悪くて！いやそんなに悪くは無いけど！だ、だから自分が
らベッドに入つたとかじや…」

「わ、わかつたから落ち着け」

「う、うん…あ、そういうばももう体は平氣？」

「まあ少し痛む程度だから心配ない」

「よかつた…」

「…えつと、小咲さん質問してもいいですか？」

「え？こ、小町ちゃん！」

どうやら今小町がいたことに気がついたようだ。

「お兄ちゃんと小咲さんつて付き合つてるんですか？」

「えつ？ち、違うよ！た、ただの友達！」

「そうだつたんですか。友達ですか… 小咲さん、ちょっとカモ
ン」

「え？う、うん…ええつ？うん…そ、そんなの私には
！…え？でも…うん」

何話してるんだあいつら？

「よし！この話は終わり！」

「何話してたんだ」

「そんな野暮なこと聞いちゃいけないよ、お兄ちゃん」

「あつそ… そういうや小町はおぼえてたんだな、小野寺のこと」

「…え？」

「いや、なんかすごい仲良さそだから小町はおぼえてたんだろ？小
野寺のこと」

「…おぼえてたつて何を？」

「だから、俺達小学生の頃にあつてるつてことだよ」

「…は？」

「え？」

「…あ！！思い出した!!小咲お姉ちゃん！最初名前聞いた時

なんか違和感あると思つたんだよ！」

「お前も覚えてなかつたのかよ」

「いや、テヘペロー…どうして言つてくれなかつたんですか！」

「え？ タイミングもなかつたし…」

「なるほどなるほどそれならあのことも納得…‥‥ あ！ それなら春ちゃんは元気ですか？」

「あ、うん。今は女子寮の中学に通つてるよ」

「いや、また会いたいな～」

「春？」

「ほら、お姉ちゃんの妹さんだよ」

「あー、そういうやいたな。確か俺めっちゃ怖がられてた記憶がある」

「まあお兄ちゃんの目を見ればね…‥」

「多分春も来年はうちの高校に通うと思うよ」

「ほんとですか!? 小町もお兄ちゃんと同じところ目指してたんですよ

！ いや、また再会できるなんて！ 小町感激！」

「というかお前騒ぎすぎ。ここ病室だぞ一応」

「あつ、忘れてた。まあとりあえず、お兄ちゃんは早く体治してね。

さあお姉ちゃん！ 今から小町と近くのカフェでゆっくり話しますよ

しよう！」

「え？ う、うん」

「それじゃあね！ お兄ちゃん！」

「え？ あいつ俺のお見舞いに来たんじゃないの？ 着替えとか色々も
らつてないんだけど。……あとで電話するか。

続く

番外編 新婚生活！？

「ふわあああ……おはよう」

「あ、おはよう八幡くん！朝ごはんもう少しで出来るから……あれえ？どうして小町じやなくて小野寺の声が聞こえるんだ？」

「ここ俺の家だよね？」

俺は目の前の光景を再認識するために目を凝らしてキッチンを見てみる。……裸エプロンの小野寺が立っていた。

「ちよつと待て、小野寺なんだその格好は!?」

「お、男の人はこういうの喜ぶつてネットに書いてあつたから……

「それ絶対いかがわしいサイトだから！」

「あと小野寺じやなくて小咲！」

「あー、そうちつたな小咲……じゃなくて！服を着ろ！」

「……嫌だつた？」

「むしろ襲いたいくらいエロくて男としては最高です。……つてそういうじゃない！とにかく服を……」

「……襲つてもいいよ？」

「……は？何を言つてるんですか？襲つてもいいって言つたこの子今。

「いや、襲つてもいいってお前」

「私達夫婦なんだし……そ、そういうこともやつぱりするだろうし」「夫婦だもんな……つて違う！夫婦！？俺達がか!?」

「？どうしたの？体調悪い？」

待て待て待て。俺と小咲が夫婦！？なんだこの状況は！？夢か？夢なんだな！うん、夢！夢じやないどこいつがこんな恥ずかしいことするわけないし。まず俺こんな突っ込むキャラじやないし。

「俺は大丈夫だから、とにかく服を着てくれ。……そ、その小咲の体は大事な時だけ見たいからさ」

「わ、わかつた」

何を言つてるんだ俺はあ！？もうやだ……でも少し結婚生活を体

験してみたい。まあそのうち目覚めるだろ。

「あ、そうだ！前言つてた約束、今日にしない？」

なんかやつてまいりましたショッピングモール。まあ小咲といるのは楽しいし今は夢の中を楽しむとしよう。

「はい、あーん♪」

「あ、あーん」

おい待て、夢の中で俺こんなことしてんの？

「美味しい？」

「……美味しい」

「よかつた！じやあ八幡くんのも一口もらつていい？」

「ああ。ほら」

「あーん」

「……」

これ俺もやらなきゃいけないのか。仕方ない、これは夢だ。

「あ、あーん」

「……うん！これもすごく美味しい！」

「そりやよかつた」

「あれ？小咲ちゃん?!」

「え？あ！千棘ちゃん！」

目の前に現れたのは桐崎と楽だつた。

「千棘ちゃん達もデート？」

「ええ、まあね」

「何お前ら、まだ偽恋人役やつてるのか？」

「何言つてるんだ八幡？俺達は結婚しただろ。披露宴も呼んだじゃないか」

「……つまり夢の中では偽恋人だったのが本物になつてたわけか。

このふたりがくつつくとはね……待てよ、集とかは……

「な、なあ、集つて結婚したつけ？」

「え？まだだろ？宮本にまだアタックしてるつて」

「でもるりちゃん、満更でもないみたいだよ？たまにあつて話する時

とか舞子くんの話が多いし」

「おお、なんか宮本のそんなところ想像出来ないわ……」

「あ、私達そろそろ行くわね」

「うん。またお茶しようね千棘ちゃん」

「八幡、またな」

「おう」

「いやー、楽しかったね！久しぶりのデート！」

「まあそうだな」

「久しぶりって俺は何か忙しい仕事でもしてるのか？」

「次のドラマ主役なんですよ？頑張つてね！」

「……ど、ドラマあ？」

「おれつてもしかして俳優とか言わないよな……」

「何言つてるの？俳優でしょ？あ、でも最近はドラマとか多いし役者さんとかかな？」

オーマイゴッド……俺が芸能人つて、めちゃくちやだなこの世界。

「あ、あのさ。2人で一緒にいられるのもあまりないし……お風呂一緒に入らない？」

「……」

「どうしてこうなった。今は小咲と混浴中。いや訳分からん。」

「そして今のこの態勢はなんだ？俺の股の間に小咲が座っている状態だ。俺こんな耐えられないよ！」

「えへへ」

「小咲はすごい嬉しそうだ。もう俺夢醒めなくともいいかも。」

「八幡くんおつきであつたかい……」

「……そりゃ男だから女よりは体つきは大きいだろ」

「そうなんだけどね……は、八幡くん、あ、あたつてる……」

「え？……す、すまん!!」

いつの間にか俺の息子が興奮していたらしい。仕方ないじやん！
心は高校生男子なんだから！理性抑えるのに必死なんだよ！？

「……八幡くん……つ」

すると、突然小咲はこちらを振り向きキスをしてきた。

「えへへ。久しぶりにしちゃった」

「……ごめん。俺もう限界。」

「……朝か」

結局あの後も目覚めぬまま最後までイッてしまつた。

いや普通こういうのっていいところで目覚めちゃうとかでしょ？
最後までいつちやつたんだけど。もうこれから小咲と会う時どう
接すればいいかわからんぞ。

「あ、八幡！」

「うつす」

「あ、は、八幡くんおはよう……」

「お、おう……」

「？なんで八幡も小野寺も顔赤いんだ？」

「平常心平常心……」

「顔合わせられないよお……」

『??』

終わり

事件から数日経ち、俺の怪我もすっかり治った。

「おにいちゃんおにいちゃん」

「なんだね小町さんや」

「夏休みだね」

「そうだな」

「なのにどうして小町達は家でゴロゴロしてるんでしょうか」「別にすることないからだろ」

「そうです。なので！今から小咲お姉ちゃんの家に行きます！」

「ちょっと待て、どうしてそうなる」

「おにいちゃん、小咲お姉ちゃんに誕生日プレゼントあげた？」

「あいつももう過ぎたのか？」

「このごみいちゃんは…小咲お姉ちゃんの誕生日は6月15日！」

「へえ～」

「全く…ということで、おにいちゃんは小咲お姉ちゃんをお祝いしてあげなきゃいけないので！」

「いや、いまさら祝つても」

「NO！早いも遅いもないので！お姉ちゃんぜつたい喜んでくれるから！プレゼントを用意する！」

「それに小野寺忙しいかもしけんぞ？」

「大丈夫！もう約束してあるから！」

この子はなんでこういうことに関しては準備が早いんだろう。
勉強にもそれくらいやる気を出して欲しい。

「小咲お姉ちゃん！お邪魔します！」

「いらっしゃい。小町ちゃん、八幡くん」

「すまんな、小町がわがまま言つたみたいで」

「うんうん、私もまたお話をかつたから気にしないで。さ、上がつて

！」

「おにいちゃん」

「ん？」

「今日はゲストもいるよ♪」

「ゲスト？」

そして俺達はリビングに案内された。そこにいたのは…

「…お、久しぶりです、お兄さん、小町ちゃん」

「…春、だよな？」

「は、はい」

「春ちゃん！久しぶり！会いたかったよお！」

「こ、小町ちゃん！暑いよお！」

「ゲストって春のことだつたのか：」

まあたしかに驚いたわ。夏休みだし帰ってきていてもおかしくないか。

「元気だつたか？」

「は、はい。お兄さんは相変わらず…」

「目はデフォだ。治らん」

「べ、べつにそういう意味で言つたわけじゃありません！」

「あとさ、お前なんでさつきから敬語なの？」

「え？えつと…」

「わかつてないなー。春ちゃんは久しぶりにおにいちゃんと会つてどう接すればいいのが分からんんだよ」

「べつに昔みたいでいいぞ？」

「…う、うん。わかつた」

「それにしても春ちゃんさらに可愛くなつちやつたなー！もう抱きしめたい！」

「お前もう抱きしめてるだろ」

「こ、小町ちゃんこそすごい美人だよ」

「ありがとー！…おにいちゃんはどう？」

「ええつ！…す、すぐかっこよくなつたと…思う」

「わざわざお世辞言わなくてもいいぞ…」

昔はめつちや怖がられてたからな。まあ今は昔ほど怖がられては

いないけど。

「ううん、本当にかつこよくなつたよ、お兄さん」

「…」

やばい、春の顔を見れば本心で言つてるのがわかつてしまつてすごい恥ずかしい。

「…春ちゃんも成長したね！」ボソツ

「？どういうこと？」

「今 のセリフ恥ずかしくてそう言えないよ！」

「…くつ!!お、お兄さん！今 の忘れて！」

「ええ～今結構キュンと来たのに」

「おにいちゃんがそんな事言つてもきもいだけだよ」

「小町にキモイつて言われた…」

「うう～…」

まあでもなんかこういう時間は楽しいな。この4人でいるのはなんかしつくり来る。

「そういうや、おばさんはどうしたんだ？」

「お母さん？今はちょっと出かけてるんだ。なにか用があつたの？」

「いや、大したことじゃない」

昔のこととか聞いてみたかつたんだけど、まあ今度でもいいか。

「それじやあ今からどうしようつか？」

「…」

「…お前ら約束しといで何するか決めてないのかよ」

「あははは…いやー春ちゃん帰つてくるつて聞いて会いたかつたので頭いつぱいだつたから」

「まあじやあ…ほら小野寺」

「え？…これつて？」

「あー…遅くなつちまつたけど、誕生日プレゼントだ。桐崎は祝つたのに小野寺だけ祝いがないのも変だしな」

「…八幡くん…ありがとう！すごい嬉しいよ！」

「お、おう、そうか」

「開けてみてもいい?」

「ああ」

「：わあ！綺麗な髪留め！」

「おお、おにいちゃんにしてはセンスがいい！」

「お前失礼だな」

「…えへへ、どうかな？」

「つ：い、いい感じだと思うぞ」

「おにいちゃん、今見惚れたでしょ」

「ば、ばつか！ちげえよ！」

そう、別に見惚れてたわけじゃない。うん。後ろの窓にいたてんと
う虫に見惚れてたの。うん。

「うわー、すごい必死」

「ほんとにありがとう！すごい嬉しい！」

「まあ喜んでくれたならなによりだ」

「いや／＼良かつたねおにいちゃん！これ！小町からもプレゼントです

！」

「小町ちゃんも？ありがとう！」

「わあ！ブレスレット！」

「お姉ちゃんイメージして選んだんだ！」

「どつても可愛いよ！2人とも、ほんとにありがとう！」

小野寺も喜んでくれたみたいで良かつた良かつた。

続く

19話

ピンポン

「はーい！…小咲お姉ちゃん！」

「ここにちは、小町ちゃん。八幡くんいる？」

「いますます！お兄ちゃんー！」

「なんだよ：小野寺？」

「ここにちは、八幡くん」

「どうした？何か用か？」

「う、うん。えつとね…」

すると、小野寺は急にモジモジし始めた。

言い難いことなのか？

「…は、八幡くん！」

「は、はい」

「そ、その…あ、明日なんだけどね！」

「明日？なんかあつたか？」

「明日…はっ！小町わかりました！小咲お姉ちゃん！ファイト！」

「う、うん…明日縁日で神社でお祭りがあるんだけど…い、一緒に行かない？」

「宮本とかと行つた方が楽しいんじやないか？」

「はあ…これだからごみいちゃんは…」

「そ、そもそもなんだけど…八幡くんと行きたいんだ」

「こ、小咲お姉ちゃん…！…ああ！そういえば小町買つてきて欲しいのがあつたんだ！小咲お姉ちゃんに頼むのもあれだしお兄ちゃん買つてきてくれないかなー！」

「…わかつたよ。行けばいいんだろ」

「！ありがとうございます、八幡くん！」

そして次の日の夜。小野寺とは神社で待ち合わせになつた。なんかその方が雰囲気が出るらしい。知らんけど。

「は、八幡くんお待たせ！」

「お、おう…」

小野寺は浴衣を着ていた。正直めちゃくちゃ可愛い。

「…そ、その浴衣似合つてるぞ」

「あ…あ、ありがとう…えへへ」

「…行くか」

「う、うん！」

「たくさん屋台あるね」

「そうだな」

「そう言えば小町ちゃんに何頼まれたの？」

「りんご飴と、今日限定のお守りだそうだ」

「小町ちゃん好きな人いるの？」

「…は？」

「き、今日限定のつて恋結びのお守りだよ？」

「…な、なんだと。こ、小町好きな人いるのか!? ゆ、許さんぞお兄ちやんは！ そいつぶつ飛ばしてやる！ 誰だ!? 坊主頭か？」

「は、八幡くん大丈夫？」

「あ、ああ」

落ち着け落ち着け。もしかしたら誰かに渡すためかもしれん。女友達に頼まれたとか。うん。そういうことにしよう。

「よし、行くか」

「? うん」

「おっ、八幡の坊ちゃんじゃないですか！」

「ん? 楽のとこの…」

「俺達今いろんな場所で屋台出してるんすよ。八幡の坊ちゃんならた

だでいいですよ！ 楽坊ちゃんとは友人ですからね！」

「いいんですか？ ありがとうございます」

「良かつたね。ただでもらえて」

「ああ。しかも美味しい」

「次どこ行こつか…あ」

「ん? すごい混んでるな…」

「きつとお守りの列だよ」

「列つて言うのかこれ？…並ぶか」

「まさかこんなに混んでるなんて思わなかつたね」

「確かに。そんなに恋愛脳多いのかこの辺は」

「別にそういうわけじゃないと思うけど…きやつ」

「おつと。大丈夫か？」

「う、うん。ありがとう…は、八幡くん」

「ん？」

「そ、その…て、手握つてもいい？はぐれちゃうと困るし…」

「…まあそうだな。…ほら」ギュツ

「！ありがとう…えへへ」

恥ずかしい柔らかい恥ずかしい！小野寺の手つてこんな小さかつたんだな…って余計な事考えるな。これははぐれないための手段だ。

うん

「あ、順番きたよ」

「恋結びのやつ2つお願ひします」

「買えてよかつたね」

「ああ。…小野寺、これ」

「え？…ええ！」

「本当は屋台とか奢ろうかと思つてたけど、タダだったからな。まあそれ限定品らしいし、やるよ」

「そ、そういう意味…はあ」

「ん？そういう意味つて？」

その時、宣伝の声が聞こえた。

「恋結びのお守りは好きな人にあげるとプロポーズの意味があるから、帰り道とかにそつと渡すとすぐ口マンチックですよー！」

「…」

…そういう意味つてそういうことか。

「…ま、まあこれは記念つてことで」

「う、うん。ありがとう八幡くん、凄く嬉しい」ニコツ

「！ああ」

やばい。今の笑顔やばい。その辺の男子なら即落ちしてるレベル。

「少しづつお客様も減ってきたかな？」

「どうだろうな」

「そういうや楽とかも来てたのか？会わなかつたな。
まあこの人だかりだしな。」

「…」

「？小野寺？」

「そういえばさつきから小野寺に違和感を感じる。」

「…お前、足…」

「あ、あはは。履き慣れてなくて」

「ちよつと見せてみろ。…怪我してるな。痛くなかったのか？…とにかくこれじゃ歩けんな…」

「大丈夫だよこれくらい…うつ」

「大丈夫じゃないだろ。…ほら」

「…え？」

「背中乗れ。その状態じゃ歩けん」

「で、でも」

「気が変わらんうちに早くしろ」

「う、うん！…重くない？」

「別に。むしろ軽いぞ」

「まあ人を担いでるわけだから当然重いことには重いが。」

「ごめんね。普通の私服で来れば…」

「こういう時は浴衣とか着るもんだろ。気にするな。それに何かあつた時のために俺がいるのもあるしな」

「ありがとう、八幡くん」

「…」

「…私ね、まさかこうやつて八幡くんとお祭りに来ることが出来るなんて思わなかつたな」

「そんなの俺もだ。ぼっちライフを過ごすつもりがいつの間にか…」「でも、嫌じやないでしょ？ 一条くんとかと話して八幡くん、楽しそうだもん」

「…そうかもな」

俺も少し変わつてきてるのかもしれない。いつの間にか楽や小野寺達と関わるようになつて。これじゃボツチ失格だな。

「私は八幡くんとまたこうして再会できてすごく嬉しかつたんだ。あんな別れ方嫌だつたし…」

「あの時は悪かつたよ」

「もうあんなことしちゃダメだよ？」

「しないしない」

「…ほんとに？」

「…ああ。しないから安心しろ」

「うん。わかつた。それなら安心だね」

「…ついたぞ」

「ありがとう八幡くん。またね」

「ああ」

「…八幡くん！」

「ん？」

「私、私頑張るからー！ それだけ！ おやすみ！」

「あ、ああ？」

何を頑張るんだ？

続く

20話

「「おおー!!」」

今日は楽達と海に来た。まあ最初は当然断つたが海行かないと小町が口聞かないとか言うんだもん。

「じゃあ私たち水着に着替えてくるから用意よろしく〜」

「あいよ。八幡手伝ってくれ」

「はいはい」

「そつちもつと引っ張れるか?」

「こんくらいか?」

「なあなあ楽、八幡〜そんなことよりもつと周りを見渡そうぜ!そこらじゅうにナイスバディなお姉えさんがあたくさん〜」

「集も手伝えよ…」

「集だけテント入れねえぞ」

「お待たせー」

女子陣が着替えを終え、戻ってきた。うん。これは目の保養になりますね。

「おつーこれはこれは…はあ」

集は女子の水着を見て いき…宮本を見るとため息をはいた。あいつ絶対胸見てたな。

「ふんつー！」

「ぐふつ！」

あ、吹っ飛ばされた。

「つたく集のやつは…」

「楽様!どうですか?私の水着」

「お、おい!あんまりくつづくなよ!」

「いいではありませんか〜!」

「ちょっと万里花!あんまり楽に引っ付かないでよ!」

…樂そろそろ爆発しないかな。

「は、八幡くん」

「ん?小野寺」

「ど、どうかな…?」

「…に、似合つてるぞ」

「あ、ありがとう」

「ありや? 誠士郎ちゃん今日は女の子らしい水着だね」

「お、お嬢が選んでくださったのだが…恥ずかしい」

「似合つてるぞ?」

「!う、うるさいばか!」

「なんで!?」

樂を1発ぶん殴りたい気分だ…

「それにしても相変わらず大きいわね…えいつ!」

「お、お嬢!? な、何してるんですか!?」

桐崎は突然鶴の胸を驚撃みにした。…うらやまけしからんな。

「おおく…あんたまたでかくなつたんじやない?」

「な、なつてません!」

そういうことは男子のいないところでやつて頂きたいですね全く。
どんどんやりなさい。

「冷たーい! 鶴も早くこつち来なさいよ!」

「お嬢待つてください!」

「る、るりちゃん水かけないでよ!」

「それー」

「後なんでそんな棒読みなの!?」

「楽様、日焼け止めを塗つていただけませんか?」

「は!?

「じゃあ俺が塗つてあげるよー!」

「あなたは今すぐ土に還つてください」

「ひどいな〜橘ちゃん〜」

騒がしいやつらだな全く…

ちなみに俺は浮き輪の上でプカプカ浮いております。

「それ!」

「どわつ!? …ふはつ!…桐崎何しやがる」

「あんたももつと騒ぎなさいよ！海よ海！」

「お前らは騒ぎすぎなんだよ…ぶつ！」バツシャーン！

すると今度はどこからかビーチボールが飛んできた。

「俺らと海に来てのんびり出来ると思うなよ～？」

「…集、てめえ…うおつ!? 危ねえな！ 楽まで何しやがる！」

「ははは！ 千棘！」

「おつけー！とりや！」

「どわつ！俺ばつか狙うな！」

「小咲、あんたどうさくさに紛れて比企谷くんに抱きつきなさい」

「何言つてるのるりちゃん!?」

「じゃあ食事当番決めようぜ～。みんなくじ引いてあたりが出たら食事当番！」

「はずれですわ」

「私もハズレだ」

「あ、私も」

「俺もだ」

「私もよ」

「じゃあ俺は…俺もハズレだな～」

「…あたり」

「わ、私も」

「私もやるよ？」

結果、俺と小野寺が食事当番になりました。

どうしよう、嫌な予感しかしない。

「よし、じゃあ小野寺は材料の準備を頼む。俺が食材切つたりするから」

「大丈夫だ。小野寺は食材の準備とかを頼む。いいな？ ほかは何もするなよ？」

「う、うん？」

「おおー！ 美味い！」

「ほんと！あんた楽と同じくらい料理うまいんじゃない？」

「まあ俺は目が腐つてること以外基本高スペックだからな」

「自分で言うのかよ…」

「それにしてもホントに美味しいですわ。今度料理教えて欲しいくらい

い」

「わあ！綺麗！」

「おい集！花火こっちは向けるな！」

「綺麗ですわね〜」

今はみんな花火に夢中だ。まあ俺は少し離れたところで休憩して

るけど。

「八幡くん、隣いい？」

「ん？小野寺か。いいぞ」

「ありがとう。…今日は楽しかったね」

「俺は集達にボロボロにされたけどな」

「あ、あはは…もうすぐ夏休みも終わっちゃうね〜」

「そうだな。宿題やつたか？」

「うん、八幡くんも？」

「俺は最初の方に終わらせておいたからな

「さすがだね」

「…」

「…」

「…ねえ八幡くん」

「なんだよ？」

「…キス、してもいい？」

「…え？は!?」

「い、今小野寺なんて言つた!?き、キス？接吻!?口づけ?!

「…!!い、いい今のなし!!い、今のはつい考えてることが出ちゃつたと
いうが！と、とにかく今は忘れて!!あ！わ、私先戻ってるね！それ
じゃ！」

「あ、おい…」

猛スピードで戻ってたよ…それにしても、なんで小野寺のやつ急に
あんないと言ったんだ…?

続く

2 1話

海へ遊びに行つてからさらに数日が立ち、夏休みも終盤を迎えていた。

「あと2日で終わり…はあ…2ヶ月足りない…いつて！」

そして、俺の願いも虚しく夏休みも終わり、二学期がやつて來た。
「さて諸君！一学期になつた訳だが二学期と言えば文化祭！文化祭と言えば劇！うちのクラスはロミオとジユリエットをやることになつた訳だが…ロミオとジユリエット役に俺は楽と桐崎を推薦したい！」

文化祭実行委員である集がそんなことを言い出す。まあこいつらがカツプルなのはクラスの奴らも知つてゐし妥当かもな。まあ偽恋人だけど。

「…私やらない」

「ありや？ ひつたりだと思つたんだけどな？」

「なら楽様！ わたくしとぜひ！ 桐崎さんも構いませんわよね？」

「…好きにすれば」

この桐崎の態度。あの海の1件からこいつら2人の空気がおかしい。

何かあつたのは確かだろう。

「彼女さんの許可も出たことですし、楽様！」

「それなら俺も！」

「おい一条！俺にロミオ役やらせろ！」

「だあ！ もううるせえな！」

結局くじ引きになり、ロミオとジユリエットに決まつたのは：

「くつ、また一条なのか…」

「小野寺さんとなんて羨ましい！」

そう、楽と小野寺。

「よろしくね、一条くん」

「あ、ああ！」

嬉しそうですね、楽さん。

「お、小野寺さん！私と役を交代してください！」

「橘ちゃん、くじ引きで決まつたんだから仕方ないよ」

「ああ！ 楽様！」

あいつは楽の事になるといつも騒がしいな…：

「八幡くんは何やるの？」

「兵士役」

「…そ、そつか」

地味な役で悪かつたな。

そして練習開始。楽も照れながらではあるがちゃんと練習し、順調に文化祭に向けて進んでいた。しかし、事件は突然起こつた。

休憩中、廊下で楽が桐崎にビンタをされたのだ。いや、まあ吹っ飛ばされることは多々あつたが、それではない。明らかに険惡な雰囲気だつた。

「…悪い、ちょっと頭冷やしてくるわ」

「一條くん達、やつぱり何かあつたんだ…」

「いつもの感じではなさそうだな」

「大丈夫かな…？」

「俺達は事情知らないしな。あいつらで何とかするしかない。当日に何も起こらなければいいが…」

そしてついに文化祭当日。あれからは大きなことは無かつたがまだ楽達は喧嘩してるようだ。喧嘩か知らんけど。

「寺ちゃん！ 大丈夫!?」

「う、うん。これくらい…つ！」

「捻挫してるな…これじや劇には…」

「そんな…」

ちつ、ここで問題発生か。ほんとに何か起ころとは…

「橋は代役できないのか?」

「橋さんは昨日熱が出ちゃったみたいで…」

あいつ何のために代役いると思つてるんだ…まあ熱が出てしまつたものは仕方ない。

「どうしたんだ!?

そこに楽が駆けつける。

「小野寺が捻挫しちまつたんだ。代役の橋も休みで万事休す」

「そんな…」

「…桐崎」

「え?」

「あいつなら出来るんじやないか? あいつなら台本くらい一瞬で覚えられるだろ?」

「そうか!」

「楽、頼んだ」

「お、俺? でも俺じや…」

「お前達の状況はわかってる。だから尚更だ。おそらく…」しかないぞ、お前らが仲直りするには

「八幡…ああ。わかつた!」

つたく世話かけさせやがつて…

「どうしよう…私のせいで…」

「小野寺、お前のせいじゃない。事故なんだ、仕方ない」

「でも…」

「…なら責任をとつてもらう」

「…え?」

「小野寺のせいで劇が出来るか分からなくなつたんだ。その本人も責任を感じてるなら責任をとつてもらう」

「ちよつと比企谷くん! 寺ちゃんのせいじゃ」

「楽と桐崎を信じろ」

「八幡くん…」

「それが責任の取り方だ。楽と桐崎を信じろ。楽は普段憎たらしいが

やる時はやる奴だ。多分」「最後の余計だよ…」

「桐崎だつて普段はツンツンしてるが素直じゃないだけだ。ちゃんと話しあえればいいだけなんだよ、あいつらは。だから信じて待て」

「…うん。待つよ。一条くん達はきっと来てくれる」

「ああ」

「おーい！待たせた！」

「来たか」

樂は無事桐崎と仲直りしたようだ。

「行くぞ！」

「おう！」

そして、ついに舞台開演。劇は順調に進んだかと思われた…
「屋敷から抜け出そうとするロミオ。召使いの制止も聞かずジユリエットの元へ行こうとします」
「本当に行つてしまふのですか」

鶴のやつ棒読みだな…

「キヤピュレット家の者があなたの命を狙つています」

「私はどうしても行かなければいけないので。彼女は今もバルコニーで待つっている」

「止まらないロミオ。そして召使いはある決意をするのです！」

…こんなシーンあつたか？

「実は召使いはロミオに恋をしていたのです！」

あいつふざけ始めたなこれ…

「召使いはこれが今生の別れになると思い、愛の告白を決意するのであつた！」

「そ、そんなの聞いてないぞ！」

「つ、鶴！周り周り！」

「…ぐつ…ろ、ロミオ様、じ、実は私あなたのこと…す…す…つて言えるかー!!」

「おおーと！告白失敗！」

何やつてるんだあいつ…

「舞子集はどこだー！」

「す、進むか」

「お待ちくださいロミオ様！」

「おおつと、ここで新たに刺客が現れた！」

「私は…えつと…ジョセフィーヌ！ロミオ様の本当の恋人ですわ！」

「た、橋!？」

「あいつ熱じやなかつたのか：」

そして橋はそのまま演技を続け、樂を止めようとするが樂の言葉で橋撃沈。そして次に現れたのが：

「私はジュリエットの兄、フリードリヒ！」

：桐崎の所のギヤングのクロードさんだつた。もはや生徒ですからない。

「なんでいるんだよ!？」

「きさまにジュリエットをやるわけにはいかない！貴様さえいなれば…ジュリエットは我がもとに！」

「おおつと…どうやら重度のシスコンでいらっしゃる模様！」

「あいつ楽しんでるなー…」

そしてフリードリヒはロミオを追い詰めていく。

ロミオは悪あがきでレンガを投げる。そして…城壁を支えていたレンガも。

「！しまつ！」

「ろ、ロミオー！」

ロミオとフリードリヒは城壁の下敷きに…大丈夫か？

「果たして決闘に勝つたのは…」

「…！ロミオ！」

「…い、今行くぞ、ジュリエット！」

「ロミオだー！」

客陣から歓声が巻き起こる。なんか俺も乱入したくなつてきた。

「待て！」

「…は、八幡?」

「な、なんとまだ乱入者がいたー！」

「俺の名は…リアム！・ジユリエット様の兵士！・ジユリエット様は俺の物だ！」

「兵士はジユリエットに恋をしていたー！叶わぬ恋…それが認められないリアムはロミオと対峙します！・あとなんか名前かっこいい！」

「そうだろう。俺がだてに黒歴史だけを作ったと思うなよ…！」

「ロミオ！俺はお前を恨んでる男子全員の代表として倒す！」

「それ劇関係なくない!?」

普段橘とか桐崎とかと仲良くしてお前が悪い。

「勝負だ！爆ぜろリア充！弾けろシナプラス！パニッショメント…」

「こ、この先は問題ありそうなので神の力で兵士撤収！」

「お、おいまだセリフ終わってないぞ！」

「あいつあんなキャラだっけ…」

いやーちょっと浮かれた。

「そしてついにあらゆる刺客を退け、ロミオはジユリエットの元に！」
「…ああロミオ、あなたはどうしてロミオなの？あなたがモンタギュー家のロミオでなければこの愛を邪魔するものは何も無いというのに…そのロミオという名のかわりに、私の全てを受け取つてください」

「…頂戴しましょう。…愛しのジユリエット」

「…ええ」

そして、劇は無事？閉演した。

「「「おつかれー！」」

「いやー！なんとか終わつたな！」

「おい舞子集！きさまあれはどういうことだー！」

「つたく騒がしいな…小野寺、もう足は大丈夫か？」

「うん。それにしても千棘ちゃんさすがだね」

「そうだな」

「でも1番驚いたのは八幡くんが劇に乱入したことかな」

「いや、なんか体が勝手にな…」

恥ずかし恥ずかし恥ずかしい！何故あんなことを！黒歴史確定だ

⋮

「……私も出たかつたなあ⋮」

⋮

小野寺は劇の練習も熱心に取り組み、努力した。それが当日に捻挫して出られなかつたんだ。相当悔しいだろう。

「…小野寺、これはただの提案だが⋮」

「わあ！綺麗な夕日！」

「ここなら誰もいない。思いつきりできるぞ」

「うん。でも少し照れるな。八幡くんセリフ覚えてるの？」

「楽の練習ずっと見てたからな。嫌でも覚える」

「そつか。…その口ミオの衣装、似合つてるよ」

「お、おう…小野寺もな」

「ありがとう⋮」

「…じゃあやるか」

「うん」

「…愛しいジユリエット、僕は君と僕とを隔てる全てが憎い…どうして神は僕達にこのような試練を与えるのでしょうか」

「…ああ何故私達の両親は憎み合い、争うのでしょうか…本当なら私たちのように手を取り合い、想い合うことも出来るというのに」

「…いけないジユリエット、もう別れの」

「八幡くん！」

「…小野寺？」

「…ありがとうございます。嬉しい…凄く嬉しい！」

その時の小野寺の顔は、夕日に照らされ、今までで1番輝いて見えた。

続く

文化祭も無事終わり、次にやつて來るのはそう……

「体育祭!!!」

「みんな勝つぞー！」

「おおー！！」

「なんで男子だけこんなやる気なんだ？」

「なんか、一位になつたら好きな女子とデートできるんだとか」

「そんなこと誰が言つたんだ？」

「恭子先生」

「…あいつらよく騙されるな」

「最初は400mリレー！みなさん、気合を入れていきましょう！」

「じゃ行つてくるわ」

「楽々頑張れよ～」

「一條くん、頑張つて！」

「樂！負けたらぶん殴るからね！」

「おう！」

「お前あそこで転ぶなよ…」

「し、仕方ないだろ！」

ラスト直前、うちのクラスのアンカーである楽と5組のアンカーが一位争いをしていたんだが、ゴール直前で楽は転んでしまったのだ。
そして、競技はどんどん進んでいき、ついに俺の競技。

「ラストは借り物競争！これは難易度が高いほどポイントが多くもらえます！運も実力のうち！みなさん頑張つてください！」

この俺にかかるば一瞬だ。…直感的にこれだ！

「どれどれ……」

……う、嘘だろ…

「どうしたんだ？八幡のやつ、固まつてるぞ」

「何引いたんだろう？」

「うわ！あいつ涙目でこつち見てきた！一体何引いたのよ！」
ど、どうすれば…俺に恋人なんていないぞ!!

紙に書かれていたのは、恋人だつたのだ。

「助けてらくえもーん！」

「気持ち悪いぞ!? 何書いてあつたんだよ!?!」

「これだ…」

「どれ…恋人…」

「なによこれ！ いなかつたらどうしようもないじゃない！」

「…私に案があるわ」

「宮本？」

「…小咲、あなたの出番よ」

「…え？」

「おつと！ 1着は比企谷八幡選手！ お題は…恋人です！ これは恋人がいなければ不可能な問題！ しかし成功すれば大きなポイントになります！ お相手は…寺ちゃん⁈」

「お、 小野寺さん⁈」

「お、 小野寺さんに彼氏いたのか⁈」

「あの腐った目のやつ、 羨ましい！」

どうしてこうなつた…

「な、 なんか凄い騒がしいね…」

そりや小野寺は結構男子から人気あるから騒ぐのもしょうがない。

「比企谷くんと寺ちゃんつて付き合つてたの？」

「え、 えつと…あはは」

「ほら、 もうゴールしたらしいだろ？」

「…まだダメです！」

「は？」

「恋人のフリをしている可能性があります！ ここで恋人である証拠を見せてもらいます！」

「はあ!？」

「ええ!？」

なんかめんどくさいことになつてきただぞ…

「こちらが出す指示をその通りやれば本当のゴールです！」

「し、 指示つて…?」

「…お互い 10秒間抱きしめあつてください！」

(…ええーー!?)

「恋人同士ならできますよね？」

「ぐつ…」

「これはまずいぞ。どうすれば…」

「…は、八幡くん」

「小野寺…?」

「…私は大丈夫だから…しょ?」

「で、でもな…」

「私じゃ嫌、かな…?」

「いやむしろ嬉しい」

「え?」

「…何でもない。…ほんとにいいのか?」

「う、うん。勝つためだし…」

「…わ、わかつた。…いくぞ?」

「う、うん」

「…」ギュッ

「…!」

恥ずかしいい匂い恥ずかしい！リア充はこんなこと普段やつてるのか。どんな思考回路してんだ一体。…小野寺の体意外と小さいな。なんかいい匂いもするし柔らかいし…はつ、煩惱退散煩惱退散。まだ10秒経たないの!?

「うわあああ！俺の小野寺さんがあ！」

「あいつ絶対許さねー！」

うるさいぞ観客共。もうこれ黒歴史確定だな…

「…お、おいもう10秒経つてるだろ?」

「あ、ばれた?」

この野郎…

俺はすぐ小野寺から離れる。

「すまんな小野寺、抱きついちまつて…小野寺?」

小野寺の顔を見るとめっちゃ真っ赤だつた。

「だ、大丈夫か？」

「ふえつ!? だ、大丈夫だよ！ うん！」

「そ、そうか？ … おいもうこれゴールでいいよな？」

「… いえ、まだこれでは足りません」

「まだやらせる気かよ!?」

「最後の課題は… 彼氏が彼女さんにほっぺにキス！」

「… 無理不可能恥ずかしい」

「嫌だとは言わないんですねえ」 ニヤニヤ

「こいつほんと後で覚えてろよ。

「ほ、ほほほっぺにき、ききキス… !!」

「おい小野寺、間に受けなくていいぞ」

「… … ど、どどどうぞ！」

「… お、小野寺？」

小野寺は覚悟を決めたように体を横に向け、目をつぶった。

… れしなきやいけない流れ？

「さあさあ！」

「いや、俺やるとは一言も…」

「八幡ー！ さつさとしろよー！」 ニヤニヤ

集のやつ… あいつ後でぶつ飛ばす。

「おい八幡！ するな！ 絶対するな！」

樂は必死だな…

「… 比企谷くん！」

「宮本？」

「キスしないとあることないこと噂を広げるわよ…」

ない」と言うなよ！? もうやだ…

「さあ比企谷選手！」

「ぐつ…」

するしかないのか…?

「八幡！ もしキスしなかつたら校内放送でお前の性癖バラすぞ！」

「うおい!?」

集のやつ何て脅しだ。 そんなことしたら俺の高校生活は終わりだ。

もはや今の俺にはすると言ふ選択肢しか残つてないようだ。

「…い、行くぞ小野寺」

「は、はいっ」

「…」スツ：

そして、俺は一瞬だけ小野寺の頬に口付けをした。

「きやあおあ!!」

「お、小野寺さんの頬が!!」

うるさいな観客!俺だつてしたくてしたわけじゃないわ!

「合格です!無事恋人という証明がされたので1位は比企谷八幡選手!

「「ぶーー!!」」

「なんで俺のクラスのヤツらからも非難されてんだよ!?」

「比企谷は後で学級裁判だ!」

「小野寺さんの可憐な柔肌を…あいつ許さん!死刑だ!」

「おーい樂々しつかりしろー」

もうやだこの学校…

「…小野寺、大丈夫か?」

「…あ、ありがとうございます」

「…は?」

「…それでは失礼させていただきます」

「え、ちょ…」

「失礼します!!!るりちゃああん!!!」

そう言ふと小野寺は猛スピードで宮本の元へ戻つていった。

「ふつ…俺はやっぱり孤高の狼なんだな」

「優勝を祝して!かんぱーい!!」

「寺ちゃん寺ちゃん!比企谷君といつから付き合つてたの!?」

「え?!え、えつと…」

「おい八幡!なんでしたんだよ!」

「仕方ないだろ!集のヤツにいえ!」

「にやははー！面白かったぜ！写真にも収めたし！」

「すぐ消せ！」

「やだよーん」

「小咲、頑張ったわね」

「るりちゃんなんであんなこと言つたの!?」

「小咲のためじやない」

「ま、まさかあんなことすることになるなんて…！」

「でも、嬉しかつたんでしょ？」

「…うん」

「おい比企谷！お前は死刑だ！切腹しろ！」

「うるせえ！俺はもう何言われようと屈しねえぞ！」

「あ！逃げた！待てー！！」

「こつち来んな！」

「あいつも大変ね」

「お嬢！このお肉意外といけますよ！」

「小咲、今度はマウストウマウスよ」

「無理だよ!?」

続く

「お兄ちゃん！」

「どした小町」

「もうすぐクリスマスだよ！」

「ああそうだな。欲しいもの決まったのか？」

「それもあるけどそつちじやないよ！」

「じゃあ何だよ？」

「クリスマスと言えば聖夜の夜だよ！または性夜の夜！」

「女の子がそんな事言っちゃいけません」

「小咲お姉ちゃんだよ！」

「はあ？」

「お姉ちゃんをクリスマスデートに誘いなさい！」

「なんで命令形なんだよ」

「小咲お姉ちゃんもきっと待ってるよ！」

「なんで俺が誘わなきやいけないんだよ」

「……小咲お姉ちゃんのこと好きなんじやないの？」

「ぶつ！何でそうなる！」

「いや、だつてお兄ちゃん文化祭の日に小咲お姉ちゃんが捻挫して劇に出れなくなつて文化祭終わつたあとにお兄ちゃんが小咲お姉ちゃんのために」

「ちよつと待てなんでそのこと知つてるんだ」

「前小咲お姉ちゃんが嬉しそうに話してくれた」

「あいつ…」

「あの普段外にも出たがらないようなお兄ちゃんがそんなことするなんて好き以外考えられないよ？」

「…みんな楽しそうにしてるのに小野寺だけ可哀想だと思つただけだ」

「…怖いの？関係が壊れるのが」

「…別にそんなことない。関係が壊れようと俺は元々のボツチに戻るだけだし、そもそも小野寺のことは好きじゃない」

「…ねえお兄ちゃん。確かにお兄ちゃんはたくさん辛い思いをしてきたんだと思う。でもその分お兄ちゃんは幸せになる権利があると思う。それにお兄ちゃんのことだし気づいてるんじゃないの？」小咲お姉ちゃんの気持ち

「…別にこのままでいいだろ。高校卒業したらどうせ話さなくなるんだから」

「ほんと素直じゃないなあ：お兄ちゃんは小咲お姉ちゃんのこと好きなの？嫌いなの？」

「…嫌いではない」

「あーイライラする！お兄ちゃん!!小町はお兄ちゃんが素直になるまでもう口聞いてあげないから！あと冷蔵庫のマツ缶も全部没収！」

「やめてくださいお願ひします」

「…じゃあお兄ちゃんの本当の気持ちを聞かせて？」

「…分からないんだよ。俺はあいつのこと本当はどう思つてるのか。…それに、俺のその…と、友達に小野寺のこと好きなやつがいるんだ」

「そうだつたんだ…そのお友達も大切なんだね」

「ま、まあ…大切でないこともない」

「…ならさ、お兄ちゃんはどうしたいの？」

「…今の関係を壊したくない。…でもそれで壊れるくらいならその程度のものなのかもしねりない。…だから俺も進んでみようと思う」

「…うん。小町はいつでもお兄ちゃんの味方だからね」

「…ああ」

「で、話つてなんだよ八幡？」

「…樂は小野寺のこと好きなんだよな？」

「は、はあ!?なんだよ急に！」

「真面目な話だ」

「…あ、ああそりゃだよ！」

「そりゃ…俺もかもしれないんだよ」

「え？」

「…俺も小野寺のことが…す、好きなのかもしれない」

「…」

「でもまだこの気持ちが好きという気持ちなのかよく分からないんだ。…樂には俺の気持ちを伝えておきたかった」

「…そつか。…じやあ俺達ライバル同士だな！」

「樂…」

「負けねえぜ！八幡！」

「…ああ」

…やつぱり…いつはどこまでもいい奴だな。

そしてクリスマス。俺は小野寺は誘わなかつた。まあ結局クラスのやつで集まることになつた。

「樂はどうしたんだ？」

「あいつならママの秘書してるわよ」

「どゆこと？」

「…つてこと」

「へえ、お前の母さんやばすぎだろ」

「ちくとくげく!!」

「！ら、樂！」

なんかすごい勢いで樂が現れた。

「千棘！行くぞ！」

「え？ ちよ、ちよつと待つてよ！ どこに行くのよ!?」

「決まってるだろ！ 高級ホテルのスイートルームだよ!!」

「「…ええっ!?」」

…どうなるの？これ？

続く

24話

樂が突然現れ桐崎を高級ホテルのスイートルームに連れ去った事件から数日が経ち、新年を迎えた。つまり今日は元旦。ちなみに樂のあの発言はどうやら桐崎親子の話だつたらしい。よく分からんけど。そして今日は楽達と初詣に行くことになつた。

「おつ、八幡こつちだ」

「うす。女子はまだ来てないのか」

「着替えとか時間かかるんじやないか?」

「桐崎さんとか小野寺の振袖綺麗だろうなう。な、樂

「なんで俺に聞くんだよ。まあ確かに…」

「お待たせ」

「ごめんね、少し時間がかかるっちゃつて」

「なんで舞子くんまでいるのよ」

「今日一緒に行こうつて発案したの俺だよ?」

「とりあえず行こうぜ」

「俺中吉だ」

「私は大吉よ!」

「小吉。微妙ね」

「俺も小吉だ。るりちゃんと縁があるね!」

「氏ね」

「ひどいなあ」

「私も大吉だ。八幡くんは?」

「…凶」

「…」

「まあそう落ち込むな八幡!凶ってほら、もう下がることはないつてことだし!」

「そ、そうよ!元気だしなさい!」

「わ、私の運分けてあげるね!」

「お前ら慰めるな」

余計悲しくなるだろ。

カラソカラソ

「「……」「」

「…ふう」

「八幡くん何お願いしたの？」

「別に大したことじゃないぞ？ 健康第一つて願つただけだ。あと小町の受験」

「あー小町ちゃんも受験だもんね」

「小野寺は？」

「え？ わ、私もそんな感じかな」

「ふーん」

(まさか八幡くんとずっと一緒にいられますようになんて言えないよね)

「次どうしよつか？」

「別にすることないし帰ればいいんじやね？」

「屋台出てるし回らないか？ うちのモンも店出してるらしいし」

「おつ、いいね」

「俺はかえ」

「さつ、八幡くんも行こつ」

「お、小野寺引つ張るな」

「わあ！ これもこれもただよ！」

「千棘はしやぎすぎだ」

「みんな！ 今日は食べ放題よ！」

「千棘ちゃん楽しそうだね」

「あいつ前の祭りの時も俺をフリー・パス代わりに使いやがったんだぜ」

「よし楽、あのプリキュアのお面欲しい」

「自分で買え！ っていうかプリキュア！？」

「なんだよ。プリキュアいいだろ。全年齢向けアニメじゃん。

「八幡くん、りんご飴貰つてきたけど食べる？」

「じゃあもらうわ」

「おいしいね」

「まあ…そうだな」

「また来年もみんなで来たいね」

「そうだな。来年は俺達も受験だけど」

「また勉強しなきやね。来年は小町ちゃんとか春もいるかもね」

「そうかもな。もしそうでも集に小町は近づけさせんけど」

「あはは…あれ？みんなは？」

「…そういうえばいないな」

「ちよつと電話してみるね…あ、るりちゃん？今どこにいる？…うん…じゃあそつちに…え？う、うん…そ、そうだよね。わかつた」

「なんだつて？」

「結構場所離れちゃつたからもう別々で行動しようつて」

「まあ人も多いしな。どこかでまた会うだろ」

「そうだね。…もうちよつと見て回る？」

「…少しだけなら」

「！うん！」

「八幡くん射的あるよ。一緒にやらない？」

「こういうの基本取れないからな」

「そうかもしれないけど。わからないよ？」

「やつた！」

小野寺のやつ p○4 撃ち抜きやがつた…

「まじか…」

「八幡くんにあげる」

「いや、小野寺が当てたんだから」

「私あまりゲームとかしないから八幡くんにあげるよ」

「そうか？…じゃあありがたく貰つとく」

「うん」

「次どうしよつか？」

「そろそろ帰ろうぜ。疲れた」

「そうだね」

「じゃあまた学校でな」

「うん。また学校で」

「あれ？ 小咲？」

「あ、お母さん」

「八幡くんまで。デートでもしてたの？」ニヤニヤ

「ち、違うよ！ 他にもいたから！」

「八幡くんありがとね。小咲見送つてくれて。ちょっと上がつてかな
い？」

「いえ。結構です」

「そんな遠慮せずに！ ほら！」

「あ、ちょっと！」

「ご、ごめんねお母さんがいきなり」

「気にするな。別に家帰つても本読むだけだしな」

「…」

「えつと…す、少し着替えたいから…」

「あ、ああ悪い外出るわ」

「ごめんね」

小野寺の部屋に入るのも二回目か。というか今考えるともう俺
ボツチじやなくね？ 僕のアイデンティティが…

「あれ？…」う…きやあ！」

「！ どうした小野寺…」

「…あ…」

小野寺の叫び声がしたので開けてみると…小野寺は振袖が絡まつ
て下着がちょこちょこ露出した状態になつていた。

「…す、すまん！」

「ま、ま待つて！ 振袖脱げなくなつちゃつたから…て、手伝つて！」

「い、いやでもな…」

「は、八幡くんなら大丈夫だから！」

「待て。俺が大丈夫じゃない」

「お、お願ひ！」

「…わ、わかつた」

「で、でも目開けないでね」

「どうやつて手伝うんだよそれ」

「じゃ、じゃああまり見ないでね…」

「…善処する」

…と言つたもののやつぱり無理。小野寺の胸とか色々見えてやばい。

「こ、こうか？」

「もう少し引っ張つて…ひやあ!?」

「す、すまん！」

なんか変なところ触つたか!?お、落ち着け。いつものクールな八幡に戻るんだ。

「小咲ー、ジュースとお菓子持つてきたわよ」

「うおおお!?」

「えつ、きや、きやあ!?」

突然の小野寺母に驚いた俺は小野寺の方に倒れ込んでしまう。

「…めんね小咲、お楽しみ中だつた?」ニヤニヤ

「あ、あわわわ！」

「す、すまん小野寺！」

「八幡くんも意外と大胆ね♪」

「ち、違います！これは事故で…」

「そ、そうだよ！お母さん！」

「そんな誤魔化さなくもいいのに」ニヤニヤ

「！そ、そうだ！小野寺の振袖脱ぐの手伝つてあげてください！絡まつたみたいなんで」

「あら、そうなの？あんたドジねえ」

「お、俺外でてるんで！」

なんとか回避したぞ…そもそも最初からおばさんに頼むべきだったんだ。

「八幡くんできたわよ。振袖脱げなかつたなら最初からそう言えればいいのに♪」

あなたが勝手に勘違いしたんでしょ。

「でも嬉しかったでしょ？」

「…ノーコメントで」

「ふふつ、じゃあごゆつくり！」

「…お、小野寺さつきはすまなかつた」

「う、ううん。手伝わせた私が悪かつたし…」

「…」

「…八幡くんは、さ」

「？」

「…好きな人とかいる？」

「…は？なんだよいきなり」

「…私ね…八幡くんのことが好き」

続く

「……私ね……八幡君のことが好き」

……俺今なんて言われた？ 好き？ 誰が？ 小野寺が。 誰を？ 俺を。
…幻聴じやないよな。 小野寺の顔からしてそれはない。 ドツキリ
？

ここは小野寺の部屋だし可能性は低い。 というか小野寺はそんな
ことする奴じやない。

（わ、私今なんて言つた！）こ、告白しちゃつたよね！？ど、どうしよう！
八幡くんと2人きりで嬉しくてなんかついポロツと…ぜ、絶対引かれ
た！嫌われたかな…で、でも言つちゃつたものは仕方ない！もうヤ
ケクソだよ！）

「…は、八幡くんは私のことどう思つてる…？」

「…お、俺は…」

俺は小野寺のことをどう思つてるんだ？ 嫌い？ いやそんな訳は無
い。

じやあ好き？ そもそも何で文化祭の時も、小学校の時も、小野寺を
助けようとした？ 俺が嫌だつたから。 小野寺の悲しい顔なんて見た
くなかったから。 笑ついて欲しから。 それは何故だ？

「…俺も…小野寺のことが好きだから…」

「…え？」

……あれ、今口に出した？ 出したよね？

「…ほ、ほんとに？」

「…ああ。 多分、俺は小学校の時からお前のことが好きだつたの
かもしれない…」

「う、嘘じやない？」

「こんな時に嘘つくほど俺は最低男じやない」

「…じや、じやあ…両思い？」

「…ま、まあそうなるな」

「…八幡くんつ！」

「おわつ！」

小野寺は勢いよく俺に抱きついてきた。

「わ、私言つてからもし八幡くんに嫌われたらどうしようつて、関係が壊れたらどうしようつてすぐ後悔して…」

「…まあ言われた時はびっくりしたけどよ。言われて気づいたんだ。ずっと小野寺のことが好きだつたんだつて」「嬉しい…すぐ嬉しい…」

「…俺もだ」

「…両思いつてことは付き合うつてことだよね…?」

「まあそうなるな。小野寺が嫌なら無理にとは言わないけど」

「…」で無理とか言われたらすぐ窓から飛び降りる自信あるぞ。

「そ、そんな事言わないよ!…恋人同士になるつてことだよね?」

「あんま言わないでくれ。恥ずかしい」

「…えへへ…なんだかすぐ幸せ…」

「お前ニヤケすぎだろ」

「だ、だつて嬉しいんだもん!…恋人同士ならさ、八幡くんも名前で呼んでくれない?」

「無理」

「即答!…お願ひ…」

「うつ…」、「小咲」

「!…もう1回!」

「もう言わん。というか前も言つたことがあるだろ名前で」

「そ、そうだけど、全然呼んでくれなくなつたから…」

「…これからは呼ぶから許せ」

「…もう仕方ないなあ。…八幡くん、改めてよろしくね?」

「おう」

「…」

「…どうした?」

「え、えつと…お願ひがあるんだけど…」

「なんだよ?」

「…き、キスして欲しい」

「…まじで?」

「…う、うん」

「…わ、わかつた。目閉じろ」

「うん…」

「…」スツ：

「…えへへ、ファーストキスなんだよ？」

「…そんなの俺もだ」

「…るりちゃん達にも報告しなきやね」

「まじで？ 絶対集とかからかってくるだろ。…あ」

「どうしたの？」

「い、いやなんでもない」

樂どうしよう…あいつも小野寺のことが好きなはず…1発殴られることは覚悟しておこう。

「…ふふつ」

「お、おい、腕に抱きつくな」

「恋人同士なんだからいいの！」

「うつ…」

リア充はこんなこと平氣でやつてるのか。いや、嬉しいよ？でもなんかすごい精神使う。

「今度2人で旅行とか行きたいね」

「まあそのうちな」

「浮気とかしちゃダメだよ？」

「する度胸もないしそんなモテてる訳でもないんだから安心しろ」

「八幡くんのために料理も勉強しなきやね」

「無理しなくてもいいぞ。なんなら俺が作るし」

「ううん、私も少しば成長しないと！」

「とりあえず俺はそろそろ帰るわ。夜も遅いし」

「そうだね。また学校でね？」

「ああ。…またな小咲」

「うんつ。またね八幡くん！」

家

……俺、恋人出来たんだよな。…………!!!!!!
「…お兄ちゃん、帰ってきてそうそعدしたの?!キモいよ?」
「…今の俺は何を言われても動じんぞ」

「??」

「小町、重大発表がある」

「お姉ちゃんと付き合うことになつたとか？」

「……え、なんで知つてるの？」

「ほんとに!?お兄ちゃん!!」

「カマかけたのかよ：ほんとだよ」

「うおおお！お兄ちゃんがついにやつたー!!」

「女の子がうおおお！とか言わないの」

「で、どつちから告白したの!?」

「…小咲」

「お姉ちゃんかくまあお兄ちゃんそんな度胸ないしなくどうせ言われて好きなの気づいたとかじゃないの？」

「…おつしやる通りでござります」

「全く：お兄ちゃん、ちゃんと大切にするんだよ？お兄ちゃんに彼女なんでもう出来ないんだから」

「ああ。わかってる」

「そうと決まれば今日は赤飯だー！」

そして冬休みも明け、三学期。

「楽、集、話がある」

「なんだよ？」

「えつとな…俺、小咲と付き合うことになつた」

「…え？」

「…ま、まじで？」

「まじで」

「……そつか。おめでとう八幡！八幡なら安心だ！」

「…怒らないのか？」

「なんでだよ？それに、小野寺が八幡のこと好きつてことなんとなく
気づいてたしな」

「まじかよ。全然分からんかった」

「まあ八幡も鈍感だからなうで、小野寺とはもうキスしたのか？」

「ぶつ!?…集、お前そういうことしか言わねえな」

「だつて気になるじゃんとした？」

「…ノーコメントで」

「したな」

「したね」

「うるせえ。それより楽はどうなんだ？」

「なにが？」

「桐崎と」

「は?!いや、あいつとはフリだつて!…まあ悪いやつではないのは
知つてるけど

「ま、仲良くやれよ」

「俺の話はいいから八幡の話しようぜ!」

「ちつ」

「今舌打ちした!？」

「あ、楽。あんた達も聞いたの?」

「つてことは千棘たちもか」

「改めておめでとうございます。お二人共」

「ありがとう、鶴ちゃん」

「やつとつて感じね」

「あはは…るりちゃんには大変お世話になりました」

「比企谷、あんた小咲ちゃん泣かせるんじゃないわよ?」

「わかってる」

「じゃあ今日はパーティーでも開こうぜ!」

「そうね。舞子くんなしで」

「るりちゃん相変わらずだな〜」

「…八幡くんつ」

「お、おい教室で抱きつくなよ」

「…大好きだよ」

「…ああ。俺もだ」

続く

26話

今日は何の日？ そう、バレンタインデー！！つい前までならバレンタインデーという日があることすら忘れていたくらいだが、今は違う。俺にはもう彼女がいる。…期待してもいいよね？

「俺貰えるかな～」

「お前じや貰えねえだろ」

「いやでももしかしたらさー」

学校もバレンタインデーということで盛り上がっている。

「八幡、 楽チヨコ楽しみだな～」

「まだ貰えると決まつたわけじやないだろ」

「いや、 八幡は小野寺がいるだろ。俺は…」

「いや、 お前も桐崎いるじやん」

「あいつはフリだつて。だいたいあいつ俺のこと嫌つてるし」

「そんな嫌つてるようには見えなかつたが…」

「おはよう」

「小野寺！ おはよう！ チヨコは？ チヨコチヨコ！」

集のやつよくあんなことできるな…

「舞子くん、 あなたチヨコくらい貰つたことあるでしょ？」

「いやまあそなうなんだけどね～チヨコは貰えばもらうほど嬉しいからね！」

「ふふつ、 はい。 一条くんも」

「おお！ ありがとな！ 小野寺！」

「じゃあ授業始まるからまた後でね！」

……あれ？ 俺のは？

「こ、 小咲」

「どうしたの？」

「えつと…やつぱなんでもない」

「？」

「小咲！」

「八幡くん？」

「…やつぱり言えるわけねえー！」

「??」

「ど、どうした八幡？」

「…もう倦怠期なのか…」

「そういうえば小野寺、八幡にはチヨコあげてなかつたよな？」

「ぐつ…」

「恋人同士なのに」

「ぐはつ」

樂のやつ1発ぶん殴りたい…

「小野寺、もしかしたら八幡のこと嫌いになつたとか〜？」

「俺何もしてないぞ…」

「でも小野寺ああ見えて実は怒つてるかも」

「もし帰りバラバラだつたらそれしかないな…」

「八幡くん帰ろつ」

「お、おう」

…一緒に帰るということは嫌われてはいない…よな？

「それでね…」

どうしよう、貰える気配が全くない。他愛もない話して帰るだけだ。

「あ、あの小咲さん…」

「どうしたの？」

「え、えつとだな…」

いやでも自分からチョコくれなんて言えるわけない。

「…ふふつ」

「？小咲？」

「…はいつ、これ」

「…チヨコか？」

「うんっ、八幡くんは大事な人だから友達とかにあげるのとは違うの
にしたかつたんだ」

「…」、小咲

「ど、どうして泣いてるの!?」

「…正直もらえないのかと思つてた」

「ごめんね。八幡くんの顔が面白かつたからつい

「…ありがとな。今開けてもいいか？」

「うん」

「…美味しそうだ。頂きます」

「どうぞつ」

「…」

「あ、あれ？八幡くん？八幡くん！」

…そういえば小野寺は料理すごい苦手なんだつた……

「…」ちそうさまでした……

「八幡くん！八幡くーん！」

続く

27話

私の名前は小野寺春！今年から高校一年生！昔から仲良しの比企谷小町ちゃんと今日から同じ高校です！

「いやーついに私達も高校生だね！春ちゃん！」

「うんっ！頑張ろうね！」

「そういえば春ちゃんと聞いた？」

「？なにを？」

「お兄ちゃん、小咲お姉ちゃんと恋人同士になつたこと」

「……ええ――!?」

「そ、 そ う か… ま あ 我 も 分 か ら な い と こ ろ あ つ た ら 教 え る か ら 頑 張 ろ
う ゼ」

「！ う ん！」

「八 幡 く 仲 い い な 」

「なん だ よ 集 」

「」

「なん か 恋 人 同 士 に な つ て か ら い ち ゃ い ち ゃ 度 が さ ら に 増 し た よ な
」

「」

「お 兄 ち ゃ ん く !!! お 姉 ち ゃ ん く !!!」

「ん ? : 春 ? 小 町 も」

「ど、 ど う し た の ?」

「お、 お お お 兄 ち ゃ ん と お 姐 ち ゃ ん が 付 き 合 い 始 め た つ て ほ ん と !?」

「… あ」

「知 ら な か つ た の か ?」

「あ ー、 ご め ん 伝 え る の 忘 れ て た」

「ほ、 ほ ん と な の !?」

「あ あ」

「そ、 そ ん な …」

「春 ち ゃ ん :」

「大 丈 夫 か ?」

「… 春 ち ゃ ん 、 カ モ ン」

「小 町 ち ゃ ん :」

ボ ソ ボ ソ

何 話 し て る ん だ ?

「そ、 そ う だ よ ね ! う ん ! 私 も 頑 張 る よ ! お 姉 ち ゃ ん !」

「な、 な に ?」

「私 蹄 め な い から ね ! お 姉 ち ゃ ん の こ と も 大 好 き だ け ど、 お 兄 ち ゃ ん
の こ と も 同 じ く ら い 大 好 き だ も ん !」

「わ ー、 春 ち ゃ ん ま さ か こ こ で 大 胆 発 言 す る と は」

「八 幡、 お 前 意 外 と モ テ る よ な」

「いや、俺こいつの兄的な感じだから。まあ妹に好きと言わされて嫌な兄はない。さあ小町も！」

「はいはいだいすきだよー」

「……ううい、今のなし！今のなし！」

「嫌いなのか…？」

「な、なんでそんな涙目なの!?…うう！き、嫌いじゃないよ！と、とにかく！私諦めないからねー!!」

「は、春ちゃん待つて！お兄ちゃんまた後でね！」

なんだあいつら…

「結局何しに来たんだ？」

「…春」

「きやあああ！！」

ん？この声…

「今の中の声じゃねえか？」

「いつてみよう！」

「どうしたの!?…一条くん？」

「なにしてんだ？」

俺達が駆けつけると他にも集や宮本などもいた。

「お、お兄ちゃんお姉ちゃん…こ、この人私のパンツ見たんだよ！」

「…一条くん…」

「…楽、1回表出ろ」

「ま、待つてくれ！別にわざと見たわけじや…」

「問答無用！滅殺！」

「ぐはっ！」

わー、桐崎容赦ないな…：

南無阿弥陀仏。

続く

お気に入り1000突破記念

家族

「パパ！」

「おお～咲、どうした？」

比企谷 咲。小咲と俺の間に生まれた子供だ。今は幼稚園に通っている。まだまだ小さいのですごい可愛い。小町と同じもしくはそれ以上。：思春期になつたらどうなるんだろうな。

「あのね！今日みんなとおままで」としたの！」

「そうか～良かつたな」

「うん！」

「パパ～咲～夜ご飯だよ～！」

「はーい！」

「いつもありがとな」

「もうつ、それは言わない約束でしょ？」

家事全般は小咲にやつてもらっている。料理も今じやかなり上手くなっている。まあたまに失敗することもあるけど。昔じや考えられないくらいの美味さだ。ちなみに俺は市役所に務めている。

「早く食べようよお！」

「はいはい。じやあいただきますして」

「いただきまーす！」

「いただきます」

「美味しい！」

「ほんと？よかつた」

「今日も美味しいな。それにしても、ほんとよくこんなにうまくなつたよな」

「いっぱい練習したから…」

「なんでだ？」

「…わかってるくせに」

「わかんないな～」

「ママはパパのためにお料理頑張ったんだよね！」

「さ、咲？」

「そうかそうか。嬉しいな」

「もうつ…」

「そう言えばね！先生がこれママ達に渡してつて！」

「え？…授業参観だ」

「ついに俺達もそれに行く時が来たのか」

ちなみに俺が小学校の時とかは両親は小町の方に行つていた。
まあ別にどうでもいいんだけどね。俺も小町の参観行きたかつた。

「ママ達来るよね？」

「もちろん。ね？」

「ああ。その日は休みにしどくわ」

「やつたー！えへへ！楽しみにしててね！」

「なにを？」

そして授業参観日。

「小咲～！」

「よう、小咲、八幡」

「あ！千棘ちゃん！楽くん！」

「お前らも来たのか」

「久しぶり！当然でしょ！」

樂と千棘は偽恋人から本物になり、そのまま結婚した。

まあこいつらなんだかんだ言つて仲良さそりだしな。喧嘩するほど仲がいいという言葉はこいつらにこそあるのだろう。

「早く行こうぜ。始まつちまう」

「それじやあみんな、そろそろアレを渡しましょー！」

「「はーい！」」「ママ！パパ！」

「咲？なに？」

「はいこれ！」

渡されたのは画用紙に絵が書いてあるものだつた。

「これママとパパと咲？」

「うんっ！」

「上手だな。俺の目の腐り具合までしつかり再現されてる」

「あ、あはは：咲上手に書けたね！」

「ほんと!?えへへ！」

「これは家宝にしないとな」

「みんな渡せたかな？じゃあ次は作ってもらつた作文を発表してもらいます！」

「作文？」

先生がそういうと、順番に発表を始めた。

「じゃあ次は比企谷咲ちゃん！」

「はい！…ママとパパへ！いつも遊んでくれてありがとうございます！ママはいつも料理作ってくれてありがとうございます！いつもとっても美味しいです！」

「咲：」

「パパ！たまに変なこと言うけどとっても面白いです！また今度一緒におままで」としようね！」

「咲！愛してるぞ!!」

「ちょっと八幡！あんたうるさい！」

おつとつい…というかなんで千棘が真剣に聞いてるんだよ。

「私はそんなママとパパのことが大好きです！これからもよろしくお願いします！」

「パパもう1回！」

「あいよ。高い高い」

「えへへ！わーい！」

「それにしても咲、いつあんなの書いてたんだ？」

「私も思つた！全然気づかなかつた！」

「なーいしょ！」

「えー？教えてよー」

「内緒つたら内緒なの！」

「お、咲見てみろ。お花咲いてるぞ」

「ホントだ！パパ早く降ろして！」

「はいはい」

「たくさんさいてる！」

「咲のやつ、はしゃいでるな」

「ほんと。なんかあんまり似てないね」

「そうか？ 小咲も結構はしゃいでる時あんな感じだぞ？」

「そうかな？」

「まあ俺に似なくてほんとよかつた」

「咲も将来結婚したりするんだよね」

「まあそうなるだろうな」

「あれ？ 八幡くんなら絶対許さんとか言うと思つたのに」

「いや、1発は殴るぞ？ でも咲が決めた相手なら俺はそれ以上は何も言わん」

「なんかお父さんみたい」

「親父さん？ そういうや小咲と結婚する時も1発殴られたな」

「お父さん、八幡くんが来る前からあいつはまだか!? ってずっと言つてたんだよ？」

「こつわ。そんな前から殴る準備してたのかよ」

「違うと思うよ。だつてお父さん怒つたふりしてたけど顔はにやけてたもん。多分八幡くんとの結婚喜んでくれてたんじゃないのかな」

「…そうだといいけどな。聞いても教えてくれなさうだけど」

「あはは…それは確かに」

「ママー！ パパー！ 見て！ 花飾り作つたよ！」

「わあ！ すごい上手に作れたね！」

「これママにあげる！」

「いいの？ ジャア：似合う？」

「すっごく可愛いよママ！ パパもそう思うよね！」

「あ、ああ可愛いぞ」

「…ふふつ」

「な、なんだよ」

「八幡くん、いつになつてもそういうこと言う時顔真っ赤にして恥ずかしがるよね」

「仕方ないだろ。こういうのは慣れるの無理」

「見て！咲もつけてみたよ！」

「おお！似合つてるぞ！よし！写真撮つてやる！」

「八幡くん子供愛がすごいよ…」

「なら3人でどううよ！」

「でも誰に…」

「それは小町におまかせっ！」

「うおつ!?お前どこから出てきたんだよ!?!」

「そんなこと気にしない！ほら！お兄ちゃんもならんで！」

「え、あ、おう」

「それじゃあいくよーっ！はいチーズっ！」

この先色んな苦悩があるかもしれない。でもこいつらがいれば何
だつて乗り越えられる気がする。

「パパ！早く行こつー！」

「はいはい」

はあ～お兄ちゃんとお姉ちゃんがいつの間にか恋人同士になつてゐるなんて……ほんとなら喜ぶべきことだと思う。私だつて嬉しい。……でもその反面、納得出来ない自分もいる。……だつて私は……

「ん？ 春か」

「…お兄ちゃん」

「何してんだ？ もう授業終わつたんだろ？」

「うん。ちょっと校内探検しようかなつて。お兄ちゃんこそ、すぐ帰りそうなのに。どうしたの？」

「ん？ ああ、俺飼育委員なんだよ。本当は樂と桐崎が今日は当番なんだけどよ。あいつら用事あるらしくてな」

「…飼育委員」

「あ、お前も入るか？ 意外と楽しいぞ？ 今からちょうど餌やりに行くところだしついてくるか？」

…きっと恋人同士だし私がお兄ちゃんと一緒にいられるのは時々だ。

…これくらい許してくれる、かな？

「…うんっ！」

「わあ！ 可愛い！」

「ここ」の学校すごいんだぞ。ワニまで飼つてるんだ」

「わ、ワニ？ 危険じゃない？」

「まあ危険じゃないって言つたら嘘になるけどな。うちには桐崎というスペシャリストがいるから大丈夫だ」

まじあいつ飼育委員に向いてる。動物と出会つて3秒で打ち解けてるもん。一方俺はいつも敵対してるけどな。ちなみに一番のライバルはマルガリータ・ド・佐藤（ワニ）。

「そなんだ…そいえば名前とかはあるの？」

「このワニはマルガリータ・ド・佐藤で、カメはロドリゲス4世、その二ワトリはクラッシャー加藤だ」

「そのネーミングセンスなに…」

「さあ？俺が飼育委員になつた時はすでに名前ついてたからなまあでもつけたやつは厨二病に近いやつだな。うん。

「春も餌やりするか？」

「！いいの？」

「ああ。まあ最初だし…うさぎの市川塩浜定吉とかいいんじやないか？」

「だからそのネーミングセンスどうにかしようよ…」

「ほら、餌。こいつ大人しいし怖がらなくともいいぞ」

「う、うん…えいっ」

「餌投げるなよ」

「だ、だつて襲つてきたりしたら…」

「うさぎは人を襲つたりしない。もつと近づいて」

「うん…さ、定吉く？餌だよ！」

そう言うと定吉は寄つてきて春の手のひらの餌を食べ始めた。

「…えへへ：可愛い」

「こここの飼育小屋たくさん動物いるから、結構楽しいぞ」

「そうだね：でもワニとかは怖いな」

「大丈夫だ危険になつたら俺が守つてやる」

「お兄ちゃん：」

「まさに兄の鏡だな」

「…バカ、ボケナス、八幡」

「おい、小町と同じようなこというな」

「…ふふつ…：じやあ入ろうかな、飼育委員」

「おつ、そうか？人数多い方が助かるし大歓迎だぞ」

「…お兄ちゃんとたくさんいられるしね」

「ん？何か言つたか？」

「なーんでもない！ほら、早く餌やりやろ！」

「お、おう？」

続
く

「あれ？八幡、小野寺は？」

とある平日。いつものように学校へ行くと、小咲の姿がなかつた。
「そういうや来てないな…」

「ホームルーム始めるぞー！今日小野寺は熱で休みだそうだ。お前ら
も風邪ひかないようにな」

あいつ風邪ひいたのか。メールの一つでもくれればいいのに…

「…学校終わつたら見舞い行くか」

「すみませーん」

「はーい…つてお兄ちゃん！」

「おう。小咲が熱出したつて聞いたからな…見舞いに来た」

「…そつか～」ニヤニヤ

「…なんだよ」

「いやー？付き合う前なら、俺なんかが行つてもうれしくないだろ、と
か言いそuddたのに今じやこれですからねー」

「…帰る」

「あー！待つて待つて！お姉ちゃんもきつと喜ぶからー！ほら！」

「…お邪魔します」

そんなに俺が見舞いに来るのが珍しいか？珍しいな。

「お姉ちゃん？起きてる？入るよ？」

「春？うん…つて八幡くん!？」

「よう。大丈夫か？」

「ど、どうして」

「彼氏として彼女が熱出したのに見舞いに行かないわけないじゃん！
ね？」

「…まあ」

「か、風邪うつしたら悪いよ」

「大丈夫だ。俺には比企谷菌という最強の味方がいるからな」

「…何言つてなお兄ちゃん」

「…忘れろ。とにかく俺のことは気にするな。ほらリンゴ持つてきたんだ。食うか?」

「あ、ありがと」

「…ちよつと待つてろ。おい春ちよつとい」

「な、なに?」

「どうしたの?」

「…ちよいと失礼」

「え?ひやあ!?」

俺は自分の手を春の額にあてる。…あつつ。やっぱりこいつも熱あるな

「熱あるな。来た時顔赤かつたから疑つてたんだ」

「だ、大丈夫だよ私は!」

「だめだ。寝てろ」

「でもそしたらお姉ちゃんの看病が」

「それは俺がやるから気にすんな。というかこれでさらに春の風邪がひどくなつたら悲しむのは小咲だぞ」

「うう…わかつたよ」

「ほら、じやあ乗れ」

「え?」

「そんな熱あつたら歩くのもやつとだろ。おんぶしてやるから早く乗れ」

「…」ういう時だけお兄ちゃんぶるんだから

「俺は普段からお兄ちゃんだろ。よつと…」

「…なんかあつたかい」

「冷たかつたら死んでるつてことだからな。あつたかいに決まつてる」

「そういう」とじやないよ…ばーか」

「…」

「小咲、待たせたな」

「どうしたの？」

「いや、春も熱出してな、寝かせてきた」

「だ、大丈夫!？」

「ああ。少ししたら良くなるだろ。それよりお前だつて熱あるんだからあんま興奮するな」

「うん……ごめんね」

「……恋人ならこれぐらい当然だろ」

「……ありがと」

その後俺は春と小咲を交互に看病した。小町が熱出した時とかよく看病したからその知識が役に立つたな。

「……八幡くん？」

「ん？ 起きたのか。どうした？」

「えっとね……汗かいたから体拭きたいなつて……」

「お、おう。じゃあ外出るから終わつたら呼んでくれ

「う、うん」

……だめだ妄想しては。一瞬「私の体拭いてくれない……？」とか言われるかと思ったがさすがにそれはないか。

「は、八幡くんいいよ」

「おう……つてまだ着替えてねえじやねえか！」

「ま、待つて！ その……背中拭いてほしいの」

「……ワンモアプリーズ」

「せ、背中拭いてほしいの」

「……いや、いいの？」

「うん……恥ずかしいけど」

「……ほんとに？」

「で、でも前とかは見ちゃダメだよ？」

「み、見ないです。見たけど見ないです」

「……」

……めんなさい。本音が出ました。いや、男の子なら仕方ないで

しょ？ ねえ？ そこの君！」

「……えつと、お願ひしていい？」

「わ、わかった……じゃあやるぞ？」

「うん…優しくしてね？」

その言い方だと他のことが始まりそう。

「んつ……冷たい…」

「…あ、あまり変な声出さないんで欲しいんですけど…」

「だ、だつて…ンンッ！」

「お兄ちゃん？お母さんが」

「どわああ!!」

「え？きやつ！」

俺が背中ふきに精神を研ぎ澄ましていると、突然ドアがあき、春が

入ってきた。それに驚いた俺は前に倒れ込んでしまう。

「…お、おおお兄ちゃん」

「…ま、まま待て。これはござか」

「なにしてるのー!!」

「誤解だー!?」

「…は、早く八幡くんどいてえ」

みなさん、こんにちは。小野寺小咲です。

私には、比企谷八幡くんという恋人がいます。

彼は普段はひねくれていて、周りから誤解されることもあるけれど、いざと言う時は優しい男の子です。

八幡くんから告白された時はもうどうしようもなく嬉しくて…思い出すだけで顔がにやけてしまいます。

そんな幸せな生活を送っていた私ですが…

「る、るるるるりちゃん！」

「どうしたの。急に電話してきて」

「ちょ、ちょっと○○まできて！大変なの！一大事なの！地球滅亡の危機だよ！」

「…なんだかよく分からぬけど、分かつたわ」

「…で、なんであんたはメガネしてマスクして帽子かぶつて変装なんてるのよ」

「あ、あそこー！あそこ見て！」

「…あれは…比企谷くん？と…だれ？」

私はお母さんにおつかいをたのまれて、街を歩いていたのです。

そんな時、八幡くんを見かけたので声をかけようかと思つたら…隣に知らない美人の女の人がいたんです。

「私も分かんないの…」

「随分仲が良さそうね……小咲、これは浮気じゃない？」

「ええっ!?は、八幡くんはそんなことする人じやないし…か、勘違いかも！」

そう、きっと勘違いに決まってる。そうだよね？

「でも、比企谷くんが笑つてるわよ…珍しくない？」

「…うう

「な、泣かないの小咲。まだ浮氣と決まつたわけじゃ…あ、移動するみたい。行くわよ小咲」

「う、うん」

「次は…映画館」

「も、もうこれデートだよ…どうしようるりちゃん!!」

「まさか比企谷くんが女たらしだつたとは…明日、問い合わせる必要があるみたいね」

翌日

るりちゃんは宣言通り、八幡くんにさつそく聞きに行きました。

私は聞きたくなかったけど、無理やり連れて行かされました。

「比企谷くん、あなた昨日どこで何をしていたの?」

「なんだよ急に」

「いいから答えなさい」

「…、怖いぞ宮本…?…昨日は家にいただけだが」

嘘…やつぱり八幡くんは…

「嘘ね。私昨日見たの。ちなみに小咲も。あなたが街にいるのを。しかも女人の人と

「…八幡くん、あの人…誰?」

「見てたのか…」

「比企谷くん、さすがに私も今回は許せないわ」

「は? なにが?」

「…こまできてとぼけるの?」

「…もしかして、勘違いしてないか?」

「勘違いもなにも、あなたは…!」

「いや、あの人俺が千葉にいたときの恩師だから」

「…え?」

話を聞くと、たまたま東京に来たみたいで久しぶりにあつただけの
ようです。

「そ、そうだつたんだ…!」

「なによ…つまらないわね」

「るりちゃん!」

「浮気なんかするわけないだろ。俺にそんな甲斐性あると思うか?」

「確かに」

「それに…お、俺は小咲しか好きになる気はないしな…」

「は、八幡くん…！」

「え、まつてイチャイチャは他所でやつてもらえる?」

「私も八幡くんのこと大好きだよ…！」

「小咲…」

「八幡くん…」

「リア充碎け散れ」

31話

「えー、突然だが、報告がある。先生な、結婚するから」

「…ええーー!!」

まさかの先生結婚宣言。結構人気者だからな、寂しがられるだろう。

「先生結婚するんだ：じやあ先生も辞めちゃうのかな？」

「かもな…まあ仕方ないだろ」

…ん？集？

「いやあー！ついにきょう「ちゃんも結婚かー！」

今集のやつ様子がおかしかったような…

先生のお別れ会＆結婚お祝い会を開いた。
みんな悲しむというよりは楽しむ感じだ。
まあ最後だしな。俺も少し先生と話した。
「あれ？八幡くん、一条君たちがいないよ？」
「ん？…ほんとだな。…ちよつと探してくる」
「どこいった…？」

集のあの一瞬の違和感…集は先生とも特に仲良かつたからな。

「…ビンゴ」

「八幡…」

「どうしたんだよお！先生とのお別れ会は？」

「先生とは少し話せたしな。…今は集の相談を聞いてやろうと思つて
な」

「あははー…やつぱ八幡は分かるか。樂のやつ氣づかなかつたんだぜ

?」

「まあこいつは仕方ない。うん」

「な、なんだよ！」

「いーや別にい？」

「なんかこいつら腹立つ…！」

「で、するのか？告白」

「…しないよ。これから結婚する人に告白つておかしいでしょ。それに叶わぬ恋つてわかつてたしね」

「いつそのこと式場から先生奪えればいいんじやね？」

「あはは、それもいいかもねー。：：いいんだよ。もう」

「…俺は言わない後悔より言う後悔の方がいいと思うぞ」

「八幡の言う通りだぜ。先生も言つてたろ？ちゃんと青春しろよ？つて」

「それが今だと思うぞ。恋の先輩からのアドバイスだ」 ドヤア
「今の八幡ものすごく腹立つなー：：でも、そうかもな」

「…集、背中向ける」

「ん？なんだよ楽…？いつてえ!!？」

樂は集の尻を蹴飛ばす。痛そうだなー（棒読み）。

「…ああ!!」

「いやー、友情だな」

「八幡、棒読みだぞ」

「樂も早く彼女作れよ。ホンモノの」

「うつせ！余計なお世話だよ！」

「…いつでも相談乗るからな」

「…ああ！さんきゅー！」

「あ、八幡くん！」

「おお、帰つてなかつたのか？」

「うん。まだカバンあつたから待つてたの。一緒に帰ろ？」

「ああ」

「…なんか八幡くん清々しい顔してるね？」

「どうか？気のせいだろ？」

「そういうえばさつきまで何してたの？」

「ちょっと喝を入れてきたんだよ」

「どういうこと???

「そういえば小町が今度飯食いに来いつてさ」

「…小町ちゃんが？」

「…まあ俺もだな。暇だつたら来てくれ。小町の飯は上手いからな」

「じゃあ今度お邪魔しようかな。あ、私も一緒に料理した方が楽しいかも！」

「それはちょっと無理

この後小咲にすごく拗ねられました。

最終話

「お兄ちゃん！忘れ物ない!?」

「ああ」

俺、比企谷八幡は今日日本を経つ。

大学が無事卒業できたので、恋人が待つイタリアへいくのだ。

小町はわざわざ俺を空港まで見送りに来てくれた。

「小咲お姉ちゃんによろしくね！」

「ああ。俺も会うの久しぶりだけどな」

小咲は高校を卒業したあと、イタリアに留学した。

本格的にパティシエを目指すそうだ。

俺はというと、小咲を支えられるようにとりあえず色々勉強した。
もちろん語学も。恐らく少しのあいだはイタリアで暮らすことに
なるからな。

「お兄ちゃん…たまには連絡してよ？」

「わかってる。寂しいのか？」

「寂しいに決まってるでしょ！『みいちゃんつ！』

「最後の最後まで『みいちゃん言うな…それじゃあ、行つてくる』

「うんっ！気をつけてね！」

「八幡ー！」

「…ん？ 楽、集たちまで…」

「間に合つてよかつた！頑張れよ！小野寺をちゃんと支えろよ！」

「俺達も応援してるからさつ！」

「小咲ちゃんを困らせるんじゃないわよ！」

「小咲はドジなところもあるからしつかりね」

「…ああ。また時々連絡する」

「お兄ちゃん！」

「…春」

「お兄ちゃん…お姉ちゃんのことよろしくね？」

「…おう。心配すんな」

「…お兄ちゃん、ちょっと顔近づけて?」

「…」

「…？」

「つ!…な、なにを」

ふいに頬に柔らかい感触が残る。春にキスされたのだ。

「お兄ちゃん! お姉ちゃんと仲良くね!」

「…ああ」

そして、ついに俺は小咲の元へと向かう。

「…あいつ、元気にやつてるかね」

小咲のことだし何だかんだ今はちゃんとやつてそうだ。
最初は不安そうだけど。

もう四年もあつてない。浮気とかされてないかな。
なんか外国つてイケメン多いイメージあるし。偏見か。
「…つくまで寝るか」

そして空港についた俺は、小咲の住んでいる家を目指す。

「…ふう。確かに地図もらつた気が…」

「八幡くんっ!!」

すると、後ろから懐かしい声がする。
聞き覚えのある、落ち着く声だ。

「小咲…? おつと」

小咲は俺を見るなり涙を浮かべて胸に飛び込んできた。

「…久しぶりだな」

「うんっ…! 会いたかつたよ!」

「…俺もだ。元気にしてたか?」

「大変なこともあつたけど、元気によつてたよ。八幡くんは?」

「俺もそんな感じだ。それにしても家で待つてくれてもよかつたぞ?」

「だつて八幡くんに早く会いたかつたから…」

「…そうか。：：じやあ行くか。小咲」

「うんっ。私、かなり料理できるようになつたんだよ？八幡くんに美

味しいって言われるようになつたんだよ？」

「そりや楽しみだな」

「…八幡くんつ」

「ん？」

「…大好きだよ」

「…俺もだ」

終わり

アフターストーリー①

俺と小咲は結婚した。23歳の時だ。

小咲の修行も一段落して、日本で小咲はお店を開くことになった。結婚初日に子供も授かつたようで、元気な赤ん坊も生まれた。名前は咲。小咲に似て可愛らしくて…俺に似なくてよかつた。アホ毛があるところなんか、俺の娘なんだなあと感じさせる。

「パパ！」

「おお咲どうした？」

「呼んでみただけ！えへへ！」

咲ももう5歳になつた。まあ娘つてものは可愛いもので、何歳になつても甘やかしてしまう。特にお父さんはそういうものだろう。ソースは俺の親父。小町に甘すぎ。練乳に砂糖入れたくらい甘い。

「ただいま」

「おう、おかえり」

「ママあ！」

「咲～、ただいま。いい子にしてた？」

「うんっ！」

「待つてねご飯今から作るから」

俺は專業主夫になつた。まさか本当になるとは思つていなかつたが。家事全般は俺がやつている。料理もやると言つたのだが、小咲曰く、「せつかく修行したんだもん、みんなに食べてほしいのもあるけど、八幡くんや咲に1番食べてほしいから」と言つたのだが、小咲を作ってくれている。

「「いただきます！」」

「美味しい！」

「ほんと？よかつた」

「仕事の後なのに疲れてないか？」

「もうっ、八幡くん心配しすぎ。そこは美味しいって言つてくれればいいんだよ」

「いやまあめちゃくちゃ美味しいが…無理はするなよ」

「無理はするなよ！」

「ふふつ、はあい」

咲が俺の真似をしたのが面白かつたのか、笑顔を見せる。

「パパ！ママ！今日一緒に風呂入ろ！」

「え？さ、3人で？」

「うんつ！」

「…咲、ママと入れ。パパはやめとくよ」

「ええ!? なんで〜？」

だつて娘の前で襲うとかシャレにならん。

「…私はいいよ？」

「…は？」

「えへへ！あつたかあい！」

「もう咲暴れないの」

煩惱退散煩惱退散。

体を洗うことに集中しろ…俺。

「パパも早く！」

「3人も流石に入れないと…」

「ほら、これなら入れるよ」

小咲はそう言うと咲を抱えて場所を開ける。

「……はあ」

俺は仕方なく入る。小咲と風呂なんて久しぶりだ。

新婚の時はまあ時々入つてたが…思い出すと恥ずかしくなつてしまつた。

「えへへ…」

「あ、あんまりひつつくなよ」

「久しぶりだから…だめ？」

「もうすぐアラサーなんだしそういうのは…」

「…八幡くん、言つていいことと悪いことがあるよね？」

「ひつ……す、すみません」

「もうつ……八幡くんだつて興奮してゐるくせに」

「……これは生理現象だ」

タオルで隠れてるとはいへ、今の体勢は俺の足の間に小咲、小咲が

咲を抱えてる状態だ。すぐバレる。

咲の面倒とか小咲の仕事も忙しかったのもあつて最近ご無沙汰だつた。

ということで俺は悪くない。おさまれ息子よ！

「いいゆだつた！」

「咲、そろそろ寝よっか」

「うん……」

咲もまだ小さいので9時になつてくると目をこすつて眠そうな顔をする。

「……服するか」

煙草は減らす努力をしている。吸うとしても咲の寝た後に、ベランダでしか吸わないようにしている。

まあ減らしてゐるだけで吸つてる時点で依存しちゃつてゐるのかね俺も。

平塚先生を恨もう。

「八幡くん、体に悪いよ？」

「……1本だけだから」

「……風、気持ちいいね」

「……お前も疲れてるだろ。洗い物とかやつておくから寝ていいぞ」

「……なんだかお風呂入つたら疲れも取れちゃつた」

「なんだそれ」

「……八幡くん」

小咲は俺の名前を呼ぶと、肩に寄り掛かつてきただ。

「好きだよ」

「……俺もだ」

「……最近忙しくて……できなかつたし……そ、その……する？」

「…小咲つてむつりだよな」

「なつ！ち、ちち違うもん！八幡くんがしたそうな顔してるから！」

「それじやあ俺変態みたいじやねえか……俺多分今日理性効かなくな
るぞ」

「…いいよ。八幡くんの好きにして」

「…とりあえず中に入るか」

さつきから恥ずかしい内容をベランダで話していた。夜だし隣の
家に聞こえてないことを祈る。

「パパ～！ママ～！起きて！」

「んう…咲…おはよ」

「ママお仕事いいのお？」

「え？…ああ!!こんな時間！…ど、どうしよう急がなきや！」

「…ふわああ…どした…」

「八幡くん時間見て時間！」

「ん？…げっ！9時じやねえか！」

「私お店行つてくるから！咲のことよろしくね！」

「咲！準備しろ！」

「もうしたよ～！」

「さすが我が娘！ちょっと待つてくれ」

俺は急いで支度を済ませる。

「よし、行くぞ幼稚園に」

「おー！」

…(れからは程々にしよう。うん。